

# 宮島の歴史と民俗

HISTORY AND FOLKLORE OF MIYAJIMA

NO. 4

1985

宮島町立宮島歴史民俗資料館

MIYAJIMA MUNICIPAL HISTORY AND FOLKLORE MUSEUM

## 目 次

|                       |              |
|-----------------------|--------------|
| ○はじめに .....           | 1            |
| ○資料館の活動 .....         | 2            |
| 1. 入館者数 .....         | 2            |
| 2. 年度別予算一覧 .....      | 4            |
| 3. 資料収集 .....         | 5            |
| 4. 調査・研究等 .....       | 7            |
| 5. 展示・普及等 .....       | 8            |
| 6. 歴史民俗資料館協議会 .....   | 9            |
| 7. 購入図書・受贈交換図書 .....  | 10           |
| ○町史のあゆみ .....         | 15           |
| ○宮島町立宮島歴史民俗資料館蔵       |              |
| 吉村氏寄託能楽関係文書目録 .....   | 永井 猛..... 21 |
| ○資料紹介―「厳島縁起」(2) ..... | 高橋修三..... 33 |

## はじめに

昭和49年4月に開館して以来、既に11年が経過しました。入館者の数も、大半が観光客ですが、ここ数年定着したように思います。修学旅行生の入館もわずかずつではありますが年々増加し、今では数十校に及んでいます。展示された資料の内容が入館者の意を満たし、かっこうな学習の場となっているからだと思ひます。これもひとえに資料を提供された町民の方々のご協力や、町行政機関の理解ある援助の賜と思ひています。

昨年開設10周年を記念して、たくさんの方々から今後の当資料館の方向についてご意見をいただきました。それらのご意見を受けて、観光地の資料館のあるべき一つの姿として、入館者に宮島はこのような自然と歴史と文化に包まれた島であり町だと、わかりやすく知ってもらえるような総合的資料館にしていきたいと思ひています。現在はわずかな職員で運営に当っているため、思うような活動もできていませんが、将来を見詰めて一つ一つの課題を解決していく努力をしています。

現在、開設11年という歳月の中から、資料の増加・諸活動の拡大等により、収蔵庫・研修室・その他等々といった付属諸施設が大きく不足してまいりました。この現象は、ひとり当資料館だけの問題ではないと思ひています。後世へ貴重な資料を保存していくことと、現在の人へ正しく文化を継承していただくための調査・研究と普及は、資料館活動の根幹をなすものです。これらの諸活動が表裏一体となって資料館活動がなされていると思ひます。活発な諸活動により、心のよりどころとなる資料館にするため、付属諸施設の整備がどうしても欠かすことのできない条件となつてきています。現在、早急に解決を図りたいと努力をしているところです。

一方、施設状況の如何にかかわらず、幅広く・より深くと思ひて資料の調査・研究に取り組んでいるところです。これからの調査・研究は、一資料館内の活動だけでなく関連諸機関・研究団体や研究者とも連携した幅広い取り組みが望まれます。そうした意味で、本号のため米子工専助教授永井猛先生のご寄稿をいただいたことは、調査・研究の領域が又一つ広がったとよろこんでいます。誌上を借り先生へ厚くお礼を申し上げます。

## 資料館の活動

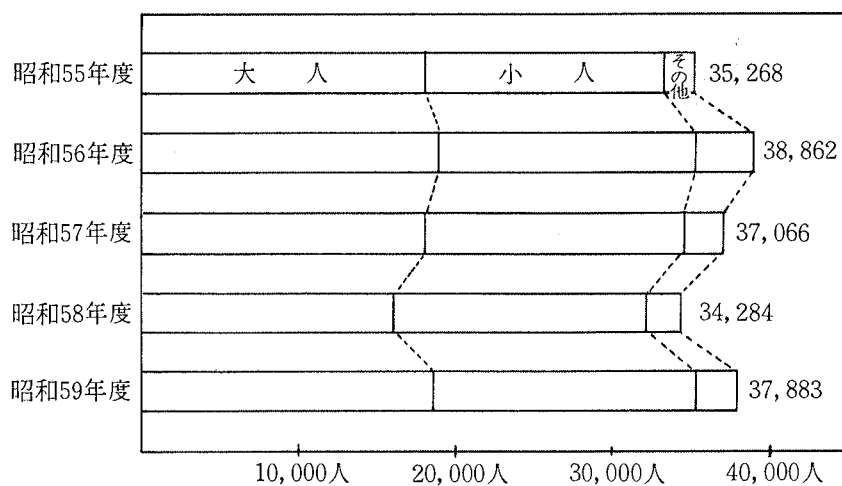
### 1 入館者数(昭和59年度)

開館以来の累計 312,695

| 月  | 大 人    |       | 計      | 小 人   |        | 計      | その他   | 合計     |
|----|--------|-------|--------|-------|--------|--------|-------|--------|
|    | 個 人    | 団 体   |        | 個 人   | 団 体    |        |       |        |
| 4  | 1,695  | 75    | 1,770  | 265   | 1,441  | 1,706  | 214   | 3,690  |
| 5  | 1,503  | 248   | 1,751  | 185   | 3,144  | 3,329  | 513   | 5,593  |
| 6  | 904    | 101   | 1,005  | 39    | 2,771  | 2,810  | 86    | 3,901  |
| 7  | 1,123  | 81    | 1,204  | 175   | 96     | 271    | 219   | 1,694  |
| 8  | 2,196  | 72    | 2,268  | 588   | 0      | 588    | 420   | 3,276  |
| 9  | 1,290  | 222   | 1,512  | 172   | 257    | 429    | 130   | 2,071  |
| 10 | 1,664  | 219   | 1,883  | 94    | 2,734  | 2,828  | 130   | 4,841  |
| 11 | 1,878  | 370   | 2,248  | 352   | 2,935  | 3,287  | 218   | 5,753  |
| 12 | 465    | 30    | 495    | 11    | 0      | 11     | 70    | 576    |
| 1  | 1,057  | 64    | 1,121  | 136   | 0      | 136    | 115   | 1,372  |
| 2  | 935    | 194   | 1,129  | 43    | 170    | 213    | 244   | 1,586  |
| 3  | 1,985  | 198   | 2,183  | 585   | 561    | 1,146  | 201   | 3,530  |
| 計  | 16,695 | 1,874 | 18,569 | 2,645 | 14,109 | 16,754 | 2,560 | 37,883 |

※小人は小・中学生、その他は宮島町民・研究者など。休館日は、12月26日～31日。

### 入館者数の推移(昭和55年度から昭和59年度まで)

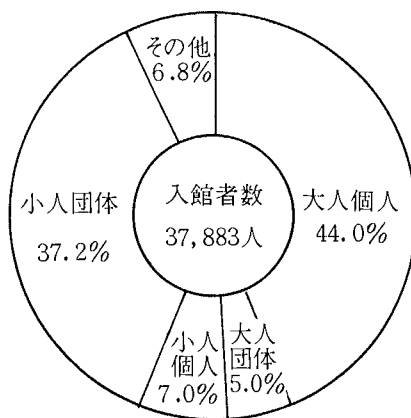


# 入館者構成の推移

(昭和55年度から昭和59年度まで)

|       | 大 人  | 小 人  | その他 |
|-------|------|------|-----|
| 昭和55年 | 48.9 | 91.1 |     |
| 昭和56年 | 48.9 | 93.3 |     |
| 昭和57年 | 46.7 | 93.9 |     |
| 昭和58年 | 49.0 | 93.2 |     |
| 昭和59年 |      |      |     |

## 入館者の構成 (昭和59年度)



## 2 年度別予算一覧

|           | 昭 和<br>55年度 | 昭 和<br>56年度 | 昭 和<br>57年度 | 昭 和<br>58年度 | 昭 和<br>59年度 | 備 考                   |
|-----------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-----------------------|
| 報 酬       | 千<br>468    | 千<br>528    | 千<br>1,509  | 千<br>1,509  | 千<br>1,557  | 資料館協議会委員、副館長報酬        |
| 賃 金       | 36          | 18          | 20          | 160         |             |                       |
| 報 償 費     | 110         | 60          | 65          | 40          | 40          | 展示資料借上謝礼など            |
| 旅 費       | 153         | 258         | 198         | 219         | 255         |                       |
| 需 用 費     | 3,909       | 3,466       | 3,702       | 4,025       | 4,229       | 消耗品費、光熱水費、印刷製本費など     |
| 役 務 費     | 106         | 124         | 111         | 105         | 288         | 通信運搬費                 |
| 委 託 料     | 3,899       | 3,708       | 3,716       | 3,417       | 3,311       | 事務補助、管理保守点検、庭園手入委託料など |
| 使用料・賃借料   | 12          | 13          | 277         | 277         | 277         | 複写機使用料など              |
| 工 事 請 負 費 |             |             | 265         | 7,701       | 1,426       | 補修工事費など               |
| 原 材 料 費   | 50          | 78          | 67          | 63          | 151         | 資料作成、修繕用材料            |
| 備 品 購 入 費 | 2,500       | 2,500       | 2,500       | 5,000       | 17,926      | 図書・展示資料購入費            |
| 負担金補助交付金  | 486         | 496         | 534         | 541         | 566         | 学会協会負担金、補助金など         |
| 計         | 11,726      | 11,249      | 12,964      | 22,787      | 30,026      |                       |

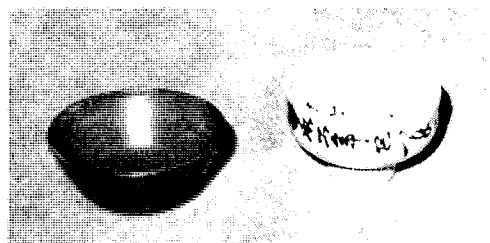
※昭和53年度より昭和56年度まで副館長報酬は兼任のため減額する。

### 3. 資料収集

#### (1)寄贈資料

| 資 料 名     | 寄贈者名    | 数量・その他  |
|-----------|---------|---------|
| 蒸 気 吸 入 器 | 木上晴登氏   | 1点      |
| 安 全 吸 入 器 | 〃       | 1点      |
| 絵葉書用写真    | 瀬田義正氏   | 8点      |
| 茶 碗       | 小田正彦氏   | 1点、宮島焼  |
| 〃         | 〃       | 1点      |
| 簞 筥       | 石 角 巖 氏 | 1点      |
| 燭 台       | 西明龍雄氏   | 2点      |
| 書「寿 多」    | 〃       | 1点、富岡鉄斎 |
| ドウジマ下駄    | 竹 本 実 氏 | 1点      |
| 蒸 籠       | 徳永忠男氏   | 2点      |
| 釜 杵       | 〃       | 1点      |
| 〃         | 〃       | 2点      |
| モ ロ ブ タ   | 〃       | 6点      |
| 置 炬 燵     | 遠藤賢治氏   | 1点      |
| 簞 筥       | 山城調次氏   | 1点      |
| そ ろ ば ん   | 〃       | 1点      |
| 屏 風       | 〃       | 1点      |
| 縦 び き     | 飯野健次氏   | 8点      |
| あ ん か     | 宮 本 誠 氏 | 1点      |
| 釜         | 〃       | 1点      |
| 蒸 籠       | 〃       | 1点      |
| 杵         | 〃       | 4点      |
| 茶 釜       | 三宅定和氏   | 1点      |
| 丸 盆       | 〃       | 1点      |

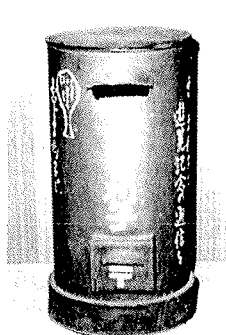
| 資 料 名           | 寄贈者名         | 数量・その他   |
|-----------------|--------------|----------|
| 楽 焼 釜           | 岩村益文氏        | 1点       |
| 扇 風 機           | 〃            | 1点       |
| も っ こ           | 〃            | 1点       |
| か ご             | 〃            | 1点       |
| 蚊 帳             | 〃            | 1点       |
| 燈 籠             | 〃            | 1点、銅製    |
| 通信杓子用ポスト        | 〃            | 1点       |
| 広島市街写真          | 〃            | 1点       |
| 温 泉 適 要 書       | 〃            | 1点       |
| 敬 老 会 写 真       | 〃            | 1点明治43年  |
| 煙 草 盆           | 田中宣行氏        | 1点       |
| 弁 当 箱           | 〃            | 1点       |
| 米 櫃             | 〃            | 1点       |
| 浄 瑠 璃 本         | 〃            | 7点       |
| 餅つき風景写真         | 岩村喜代人氏       | 1点、昭和31年 |
| か め 鉢           | 横山義人氏        | 1点       |
| 深 鉢             | 〃            | 1点       |
| 平和記念東京博覧会広島県絵葉書 | 三村義人氏        | 1点、大正11年 |
| 焼 ご て           | 山 田 勲 氏      | 4点       |
| 帳 簞 筥           | 宮 島 町        | 1点       |
| か ご             | 〃            | 1点       |
| 丸 鉢             | 〃            | 1点       |
| 看 板             | 広島県宮島公園管理事務所 | 1点       |



宮島焼茶碗



縦びき鋸



通信約子用ポスト

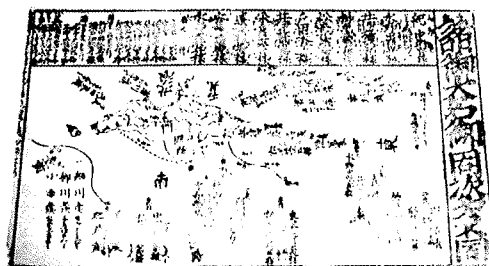


看板

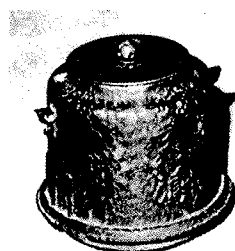
## (2)購入資料

| 資料名          | 数量・その他       |
|--------------|--------------|
| 大日本安芸国厳島神社全景 | 1点、単色刷、明治13年 |
| 宮島万燈会之図      | 1点、単色刷、弘化2年  |
| 連歌「宮島にて」     | 1点、里村玄陳作     |
| 厳島・三保の松原図    | 1点           |
| 毛利元就・隆元連署書状  | 1点           |
| 毛利隆元書状       | 1点           |
| 小早川隆景書状      | 1点           |
| 日本三景之一厳島神社之図 | 1点、多色刷、大正4年  |
| 「厳島神社雪景之図」   | 1点、多色刷、明治25年 |
| 諸御大名御国次第之図   | 1点、単色刷       |
| 夜討合戦図        | 1点、多色刷       |
| 周防大嶋郡大合戦図    | 1点、多色刷       |
| 陰徳太平記新図      | 1点、多色刷       |
| 小瀬川合戦図       | 1点、多色刷       |
| 玖波村戦争之図      | 1点、多色刷       |
| 山口之図         | 1点、多色刷       |
| 厳島旅客便覧地図     | 1点、多色刷、明治31年 |

| 資料名               | 数量・その他       |
|-------------------|--------------|
| 伊都岐嶋八景上           | 1点           |
| 厳島八景 中            | 1点           |
| 伊都岐嶋八景下           | 2点           |
| 菊間厳嶋宮奉燈万歌         | 1点           |
| 日本三景之一厳島神社之図      | 1点、多色刷、明治34年 |
| 宮島芝居番付            | 1点           |
| 明治中期広島近傍2万分の1地図形  | 1点、復刻、8葉     |
| 厳島町勢一班            | 1点、昭和10年     |
| 地形図・厳島            | 1点、5万分の1     |
| 瀬戸内海図絵            | 1点、昭和6年      |
| 厳島名勝写真帖           | 1点、明治37年     |
| 宮島名所全集            | 1点、絵葉書60葉    |
| 平和記念都市広島市地図付宮島案内図 | 1点、昭和28年     |
| 最新日本名所案内附国立公園概観   | 1点、昭和8年      |
| いつくしま名所のしるべ       | 1点、明治30年     |
| 訂正芸備史談            | 1点、明治30年     |
| 宮島釜               | 1点           |
| シガレットケース          | 1点、厳島図彫金     |
| 菓子器               | 1点、波木井昇斎刀    |



諸御大名御固次第文図



宮島釜

#### 4. 調査・研究等

昭和59年 4月20日～21日：日本展示会（名古屋市）

5月27日：資料調査（広島市・長崎氏）

6月4日～6日： 〃 （ 〃 ）

6月13日： 〃 （ 〃 ）

6月15日～16日：広島県歴史民俗資料館等連絡協議会（芸北町）

6月19日：資料調査（広島市・西明氏）

7月4日： 〃 （広島市・長崎氏）

10月6日～7日：日本民俗学会（岡山市）

10月27日～28日：部落問題研究者全国集会（京都市）

昭和60年 2月12日：同和問題講演会（広島市）

## 5. 展示・普及等

昭和59年 5月20日：来島案内（SunSun ひろしま「宮島を知る会」）

5月22日：見学案内（戸河内町歴史研究会）

7月23日：資料提供（大谷大学学生）

7月12日：見学案内（熊野町教育委員会）

7月30日：第6回資料館セミナー※

8月30日：講演「宮島の歴史」（広島県統計協会佐伯支部研修会）

9月28日：資料提供（広島文化女子短大教官）

9月29日：資料（宮島焼茶碗）の撮影（広島デザインセンター）

10月17日：資料（厳島図会・厳島合戦絵巻等）の撮影（広島テレビ）

11月10日：実習見学（広島修道大学博物館学受講生）

12月2日：中四国民見学会

昭和60年 1月10日：資料提供（朝日新聞）

1月16日：資料（誓真像、杓子）の撮影（RCC）

1月18日：資料（「二位の尼像」）の撮影（NHK）

1月29日：見学案内（広島県議会文教委員）

2月14日：資料（平清盛像、二位の尼像）及び保存民家の撮影（RCC）

3月14日：資料（二位の尼像）貸出し（源平ロマン展）

3月19日：資料（平清盛像）の撮影（広島テレビ）

3月24日：見学案内（広島県歴史教育者協議会広島支部会員）

3月27日：資料（弁才天と清盛）の撮影（広島テレビ）

### ※第6回資料館セミナー

#### 目的および内容

○厳島神社の玉垣をとりあげ、参加者自らがそれを観察・計測し、そこに刻まれている文字を読みとり、更に、拓本にとることによって資料の扱い方調べ方を学ぶ。

○玉垣のもつ意味を宮島の歴史と関わらせて考える。

#### 主催

宮島歴史民俗資料館

#### 対象および参加者

中学2年生、49名

## 6. 歴史民俗資料館協議会

### 昭和59年度資料館協議会委員

委員名（順不同）◎は委員長、○は副委員長

後藤 陽一 広島修道大学教授

定宗 一宏 広島文化女子短大教授

遠藤 泰允 広島県教育委員会文化課長

岡田貞治郎 広島県文化財審議委員

野坂 元良 厳島神社宮司

平山 真栄 大願寺住職

◎岩村 益文

小西 延穂

木上 晴登

宮郷 安輝

森脇 立夫 宮島町議会議長

佐々木一彦 宮島町議会副議長

○藤岡 国男

平野 勝 宮島町議会議員

### 昭和59年度資料協議会

昭和59年 9 月11日

協議内容

1. 委員長・副委員長の選出

2. 昭和58年度の資料館運営

3. 昭和59年度の資料館運営

○歴史民俗資料館の保存と展示について

○博物館と資料館の機能について

○特別展について（展示のための現状調査等の問題、展示資料の借用の問題）

4. 「収蔵施設等検討委員会」の報告

「収蔵施設等検討委員会」

昭和59年 6 月29日

協議内容

1. 施設等の改善を阻む要因、問題点の所在について

2. 「観光」地宮島における資料館の位置づけ、資料館の将来展望

○「博物館構想」との関連（「博物館」との相互補完性、資料館の分館設置の是非）について

3. 現状での検討事項、具体的改善策

○構想固め、体制づくり、敷地の問題の検討、各委員の改善案について

## 7. 購入図書・受贈交換図書

### 購 入 図 書

| 編著者名      | 書 名                       | 出 版           |
|-----------|---------------------------|---------------|
| 宮田登       | 都市の民俗・金沢                  | 国書刊行会         |
| 永原慶二      | 戦国大名論集、1                  | 吉川弘文館         |
| 藤木久志      | 〃、14                      | 〃             |
| 原田伴彦      | 編年差別史資料集成、第1巻・第2巻・第4巻・第5巻 | 三一書房          |
| 五日市民話民俗の会 | いつかいちの民話とくらし              | 五日市民話民俗の会     |
| 〃         | いつかいちの地名をさぐる              | 〃             |
| 〃         | いつかいちの民具が語るむかし            | 〃             |
|           | 広島県臨戦地日誌                  | 溪水社           |
|           | 広島県の美術と文化                 | 学習研究社         |
|           | 近代日本総合年表                  | 岩波書店          |
|           | 新版 日本史年表                  | 〃             |
| 岸田裕之      | 戦田大名論集、6                  | 吉川弘文館         |
|           | 広島路面電車65年                 | 広島電鉄          |
| 宮崎修二郎     | 日本の旅・名詩集、5                | 三笠書房          |
|           | 山陽鉄道案内 復刻版                | 山陽鉄道案内保存会     |
| 鉄道院       | 鉄道線遊覧地案内                  | 鉄道院           |
| 沖本常吉      | 日原町史、上巻・下巻                | 日原町           |
| 日野篤信      | 比婆郡誌                      | 比婆郡役所         |
| 長谷川頼爾     | 復刻 世羅郡誌                   | 芸備郷土誌刊行会      |
| 神石郡教育会    | 神石郡誌                      | 名著出版          |
| 名田富太郎     | 復刻 山県郡史の研究                | 芸備郷土誌刊行会      |
| 広島地方気象台   | 広島気象百年誌                   | (財)日本気象協会広島支部 |
| 金指正三      | 近世海難救助制度の研究               | 吉川弘文館         |
|           | 現代映像展示ハンドブック              | 講談社           |
| 宮本常一      | 宮本常一著作集、1～29              | 未来社           |
| 〃         | 〃、別集、1～2                  | 〃             |
| 服部幸雄他     | 歌舞伎事典                     | 平凡社           |
| 田中重雄      | 上下町神社と祭り                  | 上下町郷土史研究会     |
| 原田伴彦・上杉聡  | 近代部落史資料集成、第1巻・第2巻         | 三一書房          |

|            |                                                |          |
|------------|------------------------------------------------|----------|
| 高橋義雄       | 近代庶民生活誌、第2巻・第4巻                                | 三一書房     |
| 立川焉馬       | 平家納経 副本                                        | 厳島経副本調製会 |
| 廣谷雄太郎      | 歌舞伎年代記                                         | 宝文館      |
| 田村成義       | 続 歌舞伎年代記                                       | 廣谷国書刊行会  |
| 利倉幸一       | 続々 歌舞伎年代記、乾巻                                   | 市村座      |
| 竹中信常       | 〃 〃 〃 坤巻                                       | 演劇出版社    |
| 村上正名       | タブーの研究                                         | 山喜房仏書林   |
| 広島県教育委員会   | 広島のやきもの                                        | 国書刊行会    |
|            | 広島県民俗地図                                        | 広島県文化財協会 |
|            | 日本の葬送・墓制、1～10                                  | 明玄書房     |
|            | 日本の民間信仰、1～10                                   | 〃        |
|            | 日本の歳時習俗、1～10                                   | 〃        |
| 喜田川守貞      | 類聚近世風俗志                                        | 文潮社書院    |
| 生涯教育研究所    | 社会教育の軌跡と展望                                     | 中央書店     |
|            | 博物館・資料館設計ファイル                                  | 建築知識     |
| 五来重        | 山岳宗教史研究叢書、18                                   | 名著出版     |
|            | 国史大辞典、第5巻                                      | 吉川弘文館    |
|            | 日本大地図帳                                         | 平凡社      |
| 上米良利晴      | 熊本県神社誌                                         | 青潮社      |
| 兵庫県神職会     | 兵庫県神社誌、上巻・中巻・下巻                                | 臨川書店     |
| 友久武文 他     | 広島のわらべ歌                                        | 柳原書店     |
| 最上孝敬       | 靈魂の行方                                          | 名著出版     |
| 谷川健一       | 日本の神々、第2巻                                      | 白水社      |
| 岡村日南子      | 内山逸峰紀行文集                                       | 桂書房      |
|            | 神道大辞典、1～3                                      | 臨川書店     |
| 比嘉春潮 他     | 山村海村民俗の研究                                      | 名著出版     |
|            | 民俗民芸双書、1～3、5～21、23、<br>25～59、61～66、68～92、94～95 | 岩崎美術社    |
| 遂次刊行物      |                                                |          |
| 歴史学研究      | 527～538                                        |          |
| 日本歴史       | 431～442                                        |          |
| 地方史研究      | 181～184                                        |          |
| 広島県文化財ニュース | 101～103                                        |          |
| 博物館研究      | 第19巻4号～第20巻3号                                  |          |
| 月刊文化財      | 247～258                                        |          |
| 社会史研究      | 1～5                                            |          |

## 受 贈 図 書

### 〔鹿児島県立博物館〕

鹿博だより No.9～No.11

鹿児島県立博物館研究報告 第3号

博物館要覧 昭和59年度

### 〔大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館〕

USA SITE MUSEUM NEWS No.6～No.8

宇佐歴史民俗資料館年報 昭和59年度

### 〔長崎市博物館〕

長崎市博物館々報 第24号

### 〔佐賀県立九州陶磁文化館〕

セラミック九州 No.9～No.11

年報 No.3

佐賀県立九州陶磁文化館館蔵資料目録(III)

### 〔福岡市立歴史資料館〕

福岡市立歴史資料館研究報告 第8集

福岡市立歴史資料館年報 No.12

「漢倭奴国王」金印展図録

### 〔飯塚市歴史資料館〕

飯塚市歴史資料館年報 2

飯塚地方の絵馬

### 〔北九州市立歴史博物館〕

博物館だより 6

北九州市立歴史博物館年報 8

北九州甲冑展図録

### 〔松山市立子規記念博物館〕

子規博だより Vol.3-4～Vol.4-4

松山市立子規記念博物館年報 2

### 〔愛媛県史編さん部〕

愛媛県史 民俗下

### 〔瀬戸内海歴史民俗資料館〕

資料館だより 第18号

瀬戸内海歴史民俗資料館紀要 I

### 〔広島県〕

都道府県土地分類基本調査 可部

広島県史 近世2

### 〔広島県立図書館〕

広島県内公共図書館郷土資料目録 第26号  
～第27号

### 〔~~勸~~広島県埋蔵文化財調査センター〕

ひろしまの遺跡 第16号～第18号

年報ひろしまの遺跡―昭和57年度における  
広島県の発掘調査―

### 〔広島市教育委員会〕

九郎杖遺跡・権地遺跡発掘調査報告

佐久良遺跡発掘調査報告

末光遺跡群発掘調査報告

中畦遺跡発掘調査報告

広島経済大学構内遺跡群発掘調査報告

広島東照宮本地堂手水舎修理工事報告書

### 〔広島市公文書館〕

広島市公文書館紀要 第7号

瀬野村役場文書目録 第5集

### 〔~~勸~~頼山陽先生遺蹟顕彰会〕

雲か山か 創刊号

### 〔溪水社〕

広島民俗論集

### 〔東広島市教育委員会〕

松賀山遺跡発掘調査報告書

浄福寺遺跡発掘調査報告書

梵鐘

石造物

### 〔三次市教育委員会〕

史跡寺町廃寺跡

### 〔広島県立歴史民俗資料館〕

年報 昭和57年度

江の川の漁撈

### 〔尾道市立美術館〕

片山牧羊—その人と芸術—  
片山牧羊伝  
〔日本はきもの博物館〕  
日本はきもの博物館だより 1～18  
〔広島県草戸千軒町遺跡調査研究所〕  
草戸千軒 No.118～No.129  
草戸千軒町遺跡—第31次発掘調査概要—  
〔村上正名氏〕  
歴史研究広島 4  
文化財ふくやま 第19号  
〔神辺町立歴史民俗資料館〕  
歴史民俗資料館目録 IV  
〔宮島町〕  
広島県史 中世  
広島県史 近世2  
広島県史 現代  
広島県史 総説  
広島県史 年表・索引  
改訂江田島町史  
広島県労働運動史 第1巻～第2巻、年表  
1985年宮島町勢要覧  
〔宮島町教育委員会〕  
尾首城発掘調査報告  
長門深川廃寺 II  
下郷桑原遺跡  
社会教育情報ひろしま 第10号～第11号  
岡田山第3号古墳発掘調査報告  
法恩地南古墳  
駄荷古墳発掘調査概報  
小林1号窯跡発掘調査報告  
松永バイパス建設地内埋蔵文化財発掘調査  
報告  
御堂西古墳群発掘調査報告  
糸井古墳群発掘調査報告  
横山城跡発掘調査報告  
隠地上組遺跡

山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調  
査報告 (II)  
〔大聖院〕  
霊峰 238～249  
〔宮島ロープウエー営業所〕  
すばらしき動物 ニホンザル  
〔岡山県立博物館〕  
岡山県立博物館だより 22～23  
研究報告 5  
〔岡山市教育委員会〕  
木村コレクション古備前図録  
〔神戸市立博物館〕  
博物館だより No.7～No.10  
神戸市立博物館年報 No.1  
神戸市立博物館研究紀要 第1号  
〔国立民族学博物館〕  
国立民族学博物館国内資料調査委員調査報  
告集 5  
〔日本民家集落博物館〕  
民家集落ふるさとだより No.1～No.2  
〔京都国立博物館〕  
昭和58年度 京都国立博物館年報  
〔京都市歴史資料館〕  
昭和58年度 京都市歴史資料館年報  
京都市歴史資料館紀要 創刊号  
〔奈良県立民俗博物館〕  
民俗博物館だより Vol. X 4～Vol. XI 3  
奈良県立民俗博物館研究紀要 第8号  
〔福井県立若狭歴史民俗資料館〕  
若狭小浜城  
鳥浜貝塚 1983年度調査概報・研究の成果  
〔石川県立郷土資料館〕  
郷土資料館だより  
染と織  
〔名古屋市博物館〕  
博物館だより 37～42

〔豊田市教育委員会〕

豊田の文化財

〔日本民俗資料館・松本市立博物館〕

資料目録 民俗編 1

〔新潟県美術博物館〕

美術博物館だより 21～24

新潟県美術博物館報 昭和56・57・58年度

〔沼津市歴史民俗資料館〕

資料館だより Vol.10・No.5

沼津市歴史民俗資料館紀要 8

考古資料(1) 柳沢・伊良宇禰

〔平塚市博物館〕

平塚市博物館年報 No.7

平塚市博物館研究報告 自然と文化 No.7

〔紙の博物館〕

百万塔 第58号～第60号

〔神奈川大学日本常民文化研究所〕

民具マンスリー 第17巻 1号～第17巻12号

要覧 1984

十三塚一現況調査編一

〔サントリー美術館〕

サントリー美術館 72～75

〔東京都近代文学博物館〕

館報駒馬野 第35号

〔船の科学館〕

船の科学館報 Vol.7～Vol.8

〔ペンタックス・ギャラリー〕

Pentax Gallery News No.56～59

〔郵政省通信博物館〕

資料図録 No.28～No.29

〔千葉県立総南博物館〕

総南博物館報 第27号～第28号

〔埼玉県立博物館〕

埼玉県立博物館だより 45号～48号

紀要 10

江戸の風俗

〔埼玉県立歴史資料館〕

也加多 No.1

館報 第5号

〔埼玉県立民俗文化センター〕

展示解説

〔寺田寅男氏〕

所沢市史研究 第8号

〔群馬県立歴史博物館〕

群馬県立歴史博物館年報 第5号

群馬県立歴史博物館紀要 第8号

漁具

街道

〔栃木県立博物館〕

日光参詣の道

はなひらく縄文文化

中世下野の仏教芸術

〔会津民俗館〕

会津民俗館だより 第9号～第10号

〔東北歴史資料館〕

東北歴史資料館報 第13号

年報 昭和58年度

多賀城と古代東北

〔秋田県立博物館〕

博物館ニュース No.45～No.50

秋田県立博物館10年のあゆみ

秋田県立博物館研究報告 第9号

秋田のおいたち

〔岩手県立農業博物館〕

農業博物館だより No.35～No.37

博物館資料目録

## 町史のあゆみ

### 1、日誌

昭和59年10月1日 郷土学習講座、第20回。

宮島中学校郷土研究クラブで、是光吉基氏の講演「土器について」。

10月5日 解放研の行政講座に出席。広島市。

10月15日 中国四川省博物館一行の来島案内。

10月20日 町史専門委員会。広島市。

10月23日 石川県婦人研修、来島案内。

11月6日 広島県文化振興会議に出席。中国新聞社。

11月10日 広島修道大学学生の博物館学実習。

11月12日 郷土学習講座、第21回。

11月13日 宮島中学校、お島巡り。

11月18日 RCC、「ラジオウオーク」放送。

11月20～22日 民家建築の実測調査。

11月22～25日 日本民具学会、民具研究講座に出席。横須賀市。

11月27日 郷土学習講座、第22回。〈特別講座〉林勝治氏による「道芝記にみる動物」

11月29日 川尻町文化財保護委員の来島案内。

11月29～30日 広島県歴史民俗資料館等連絡協議会に出席。因島市。

〔 役場保存文書の目録と所在の確認をする。明治期の往復文書、庶務一件書類  
などがふくまれている。 〕

12月1～2日 中四国民具学会の開催。宮島町。

12月3日 郷土学習講座、第23回。

四川省博物館一行の来島案内。

12月5～10日 厳島神社所蔵資料のうち、工務所に保管されている資料の目録を作成し、  
写真撮影による収集をおこなう。42点。

12月12日 中国教授使節団一行の来島案内。

12月13日 人権講座に出席。広島市。

昭和60年1月7日 郷土学習講座、第24回。

1月24日 広島県警察学校生の研修、来島案内。

1月30日 廿日市町教育委員会一色征忠氏、調査のため来室。

(写真で収集した大願寺文書(近世)の筆耕をおこなう。大竹市和田世弘氏所蔵文書、厳島神社文書の写真の整理、製本をおこなう。)

2月4日 郷土学習講座、第25回。

2月5日 郷土学習講座、第26回。〈特別講座〉県立井口高校菅信博氏の講演「広島県の建築」

2月12日 同和研修。黒田清氏の講演「開け心が窓ならば」。広島市。

2月14日 RCC テレビの取材に協力。

2月28日 郷土学習講座、第27回。〈特別講座〉厳島神社宝物展「かたなとよろい」の見学と、飯田楯明氏による解説。

〔宮島小学校副読本の編集、執筆。〕  
〔山口県内の厳島神社の所在調査。〕

3月4日 郷土学習講座、第28回。

3月5日 柳井市立図書館内市史編さん室を訪ね、「いつくしま日記」(山口県文書館所蔵)など、幕末・明治期の宮島への来島記録の資料を写真にて収集する。

3月12～15日 宝寿院の資料調査。同寺所蔵資料の写真撮影をおこなう。

3月16日 町史編さん小委員会、広島市。

3月25日 郷土学習講座。第29回。〈特別講座〉県立歴史民俗資料館西井章氏の講演「山と海の民俗」

〔近代史の基本資料である「芸備日々新聞」(国会図書館所蔵)のマイクロフィルムを購入する。〕

4月1日 郷土学習講座、第30回。

4月3～4日 民家建築の実測調査。

4月4日 山県郡筒賀村池田新一氏を訪ね、大鳥居古材を利用した彫物を写真にとり収集する。このほかに大鳥居の築造来歴を記す史料も合わせて写真で収集する。

4月7日 源平800年史跡めぐり、「厳島と平家」。

4月15日 広島大学総合科学部  
留学生一行の来島研  
修。弥山火渡り式、  
桃花祭。

4月21日 源平800年史跡めぐ  
り、「厳島神社の建  
築」。

4月22～26日 宝寿院の資料調  
査。資料の写真撮影  
をひきつづき行なう。



池田新一氏所蔵 1985年4月4日撮影

4月28日 源平800年史跡めぐり、「平家納経と平氏の信仰」。

5月1日 亀井寛教育長退任。大島重信教育長就任。

5月5日 源平800年史跡めぐり、「平  
氏と弥山信仰」。

5月12日 源平800年史跡めぐり、「平  
家物語の世界」。

5月13日 郷土学習講座、第31回。

5月14～19日 国会図書館、内閣文庫  
などにおいて、地誌、  
紀行、文芸関係の資料  
を調査し、収集する。

5月19日 広島民俗学会に出席。安芸  
津町。

5月20日 大野町歴史講座「平家時代の建築」の講演。

5月27日 大野町歴史講座「平安時代の厳島」の講演。

5月27～28日 国立国文学資料館において、紀行、文芸の諸写本類の資料を調査し、収集  
する。

5月30～31日 徳島県立図書館において、地誌、紀行に関する資料の写真撮影をおこない  
収集する。

6月1～2日 中四国民具学会に参加。高松市。

6月3日 大野町歴史講座、「平家物語の世界」の講演。

6月3日 郷土学習講座。第32回。

6月6～7日 九州大学文学部において、吉村秋陽、斐山、彰関係文書の写真撮影を実施  
する。

6月10日 広島市五日市郷土史サークル来島研修「宮島の再発見」の案内。

6月20～21日 広島県歴史民俗資料館等連絡協議会に出席。神石町。

6月25日 倉敷市児島公民館を訪ね、山本慶一館長から、地誌、紀行関係資料について教  
示をうけ、写真にて資料の収集をおこなう。

6月30日 県衛連主催、海辺教室の案内（お島廻り）。

7月1日 郷土学習講座、第33回。

7月13～16日 民家建築の実測調査。

7月17日 水軍観光ルート・海上セミナー（宇品～大三島）に参加。

7月22日 広島修道大学学生の博物館学実習。

7月22～31日 島内石造物（燈籠）の実測調査。

7月23日 宮島町長寿大学で講演「宮島の今昔」。

7月23～25日 芸備日々新聞マイクロフィルムの検索。



1985年4月15日撮影

7月29日～8月2日 琴平宮、鎌倉、東京において石造物調査。

(九大、国会、内閣などの収集フィルムの整理。)

8月3日 広島大学留学生の一行来島研修。管絃祭。

8月5日 郷土学習講座、第34回。

8月7～13日 中西町野坂家の資料調査。

8月23日 中国地区幼稚園教師研究会で講演「宮島の歴史」。

8月25日 Sun Sun ひろしま、お島廻り案内。

8月26～28日 九州大学文学部の資料調査。

(芸備日々新聞、宮島関係記事のカード化を始める。)

9月2日 郷土学習講座、第35回。

9月12日 町内の町史編さん委員会。宮島町。

9月20日 故堤正信氏の葬儀に参列。

9月26日 徳寿寺道標の拓本調査。

9月30日 弥山の石造物調査。

(野坂家の写真フィルムの整理)

## 2、委員会

昭和59年10月20日 町史編さん小委員会、せとうち苑。

出席者 後藤陽一委員長、松岡久人副委員長、岡田貞治郎、甲斐英男、土井作治、藤井昭各委員。

亀井教育長、山田教育次長、町史編さん室員。

この会では、(1)町史の構成、内容、(2)専門委員、(3)経費 などについて検討がなされた。

町史の構成と内容では、資料編に、石造物と紙背文書の2巻を加えることが提案された。また、通史編の分量や、近・現代資料編にふくめる行政資料の残存状況が問題にされた。

専門委員に関しては、各巻の編集責任者が、適当な人を選ぶことが了承された。

経費については、編集費、調査費などの使い方が、検討され、事務局からは、消耗品については、一般会計から支出し、フィルム、資料の帰属は、宮島町(町史編さん室)とする旨の説明をおこない、確認された。

この他に、各巻の刊行予定計画表の作成、明治期の行政資料の予備調査の実施が求められ5年間を目標に刊行を実施するよう作業をすすめることが要望された。

昭和60年3月16日 町史編さん小委員会、新八丁掘会館。

出席者 後藤陽一委員長、甲斐英男、土井作治、野坂元良、藤井昭、藤原健蔵の各委員。

山田教育次長、町史編さん室員。

前回の小委員会にもとづき、発刊計画案の検討を行なう。

特論編、資料編の原稿完成を5ケ年のうちにおこない、その後2ケ年の余裕をもって、通史編の作成に入ることが話し合われた。

資料編の「地誌、紀行」と「文芸、芸能」は、深く関連があるので、両者をふくめた専門委員会をもつことが望まれる。芸能のうち、民俗芸能は、「民俗編」であつかうので、文献にみる芸能を、「文芸と芸能編」で担当する。

特論編のうち、「信仰」は、松岡久人副委員長との検討を待つ。「民俗編」は、文化庁木下忠氏と藤井昭委員に一任する。「自然と人」は、近・現代の資料を利用するので、「近・現代編」との打ち合わせが必要である。「建築編」は、岡田貞治郎委員に、寺院建築も担当していただき、あまり専門的にならないように心がけて記述する。

体裁について、「建築編」は、B 5 版、5 号活字、1 段組とし、1 ページ45字×18行、頭注は1 行10字とするが、カラー印刷がふさわしい巻もあるので、今後の事例検討を深める。写真などは、説明を下に入れた方が読みやすい。用語説明も図表に則したものが望まれる。

全体の執筆要項を早く作成する必要があるが、通史編は、読み易い文章とし、特論編は、ある程度専門的な内容がふさわしい。

野坂委員から、野坂家調査についての協力の申し出がある。

昭和60年9月12日 町史編さん小委員会 宮島町役場。

出席者 後藤陽一委員長、岩村益文、岡田貞治郎、櫛田典治、野坂元良、藤岡国男、森脇立夫、吉田弘の各委員。

有本幹雄町長、大島教育長、山田教育次長、町史編さん室員。

事務局から、町史の事業進行状況の報告（小委員会の活動、調査活動）をおこなう。各委員からは、読み易い内容をという声があがるが、まずその基礎となるような資料的にしっかりしたものを今回編さんするということでした承を得る。

廿日市町同和对策室長一色征忠氏に、「町史編さんと同和問題」について話をしてもらう。

### 3、調査活動

野坂家のご好意により、昭和60年8月、同家所蔵資料の調査を実施することができた。同家には、連歌をはじめ詩歌、短冊などの文芸資料、幕末から明治期にかけての日記類、近世史料が所蔵されており、個別的な調査は、かつて何度かおこなわれているが、今回のような全資料の目録作成調査は、県史編さん以来のことである。今後、何回かの調査により、目録完成を企図としているが、今回の調査においても、新出資料が発見されている。

建築編では、民家建築の実測調査を継続し、現在30軒ちかくの実測をおこなっている。この調査にご協力いただいた町内の方々にこの場をかりて、お礼申しあげます。

また、厳島神社所蔵の建築関係資料の写真撮影を実施した。

石造物調査では、是光氏の指導のもと、厳島神社周辺（御笠浜、松原）、大元社の燈籠の実測調査を実施し、現在、その作図をおこなっている。

地誌・紀行に関しては、国会図書館をはじめ、九州・四国など、各地に所在する資料の収集につとめている。それぞれの機関でお世話になった方々にお礼申しあげます。

#### 4、その他

郷土学習講座では、ひきつづき、毎月1回、『厳島道芝記』を読みすすめ、巻1の上を終えようとしている。秋には、はじめての試みとして島外研修を企画中である。

町広報紙「町史の窓」も8月号で第17回を数える。

|                       |      |                       |         |
|-----------------------|------|-----------------------|---------|
| 昭和59年4月               | 第1回  | 「身近な歴史に眼を向けよう」        | 広報第304号 |
| 5月                    | 第2回  | 是光吉基氏「瀬戸内の石造物について」の紹介 | 〃 305号  |
| 6月                    | 第3回  | 「誰が石造物をつくったか」         | 〃 306号  |
| 7月                    | 第4回  | 「町内にある石造物」            | 〃 307号  |
| 8月                    | 第5回  | 「宮島と山火事」              | 〃 308号  |
| 9月                    | 第6回  | 「天明の大風」               | 〃 309号  |
| 10月                   | 第7回  | 「宮島の山の管理」             | 〃 310号  |
| 11月                   | 第8回  | 「宮島の山の利用①」            | 〃 311号  |
| 12月                   | 第9回  | 「宮島の山の利用②」            | 〃 312号  |
| 昭和60年1月               | 第10回 | 「宮島の山の利用③」            | 〃 313号  |
| 2月                    | 第11回 | 「『道芝記』にみる動物①」         | 〃 314号  |
| 3月                    | 第12回 | 「『道芝記』にみる動物②」         | 〃 315号  |
| 4月                    | 第13回 | 「『道芝記』にみる動物③」         | 〃 316号  |
| 5月                    | 第14回 | 「広島県の建築① 郷土学習講座より」    | 〃 317号  |
| 5月号から広報紙の判がA4判たて型となる。 |      |                       |         |
| 6月                    | 第15回 | 「広島県の建築② 郷土学習講座より」    | 〃 318号  |
| 7月                    | 第16回 | 「広島県の建築③ 郷土学習講座より」    | 〃 319号  |
| 8月                    | 第17回 | 「『虎列刺』と管絃祭」           | 〃 320号  |

## 宮島町立宮島歴史民俗資料館蔵

### 吉村氏寄託能楽関係文書目録

#### はじめに

昭和六十年度の中世文学会秋季大会が宮島で催され、その最終日の十月十四日、文教大学教授であり、能楽研究所の所員でもある田口和夫先生と共に、偶然立ち寄った宮島歴史民俗資料館で、未紹介の狂言台本等が陳列されているのを見付け、興味を引かれた。

吉岡禎三館長の御厚意で、狂言台本等が寄託された当時の経緯を知っておられる宮島町教育委員会事務局の岡崎環氏に連絡をとっていただき、途中で一緒になった狂言研究仲間である関西大学助教授の関屋俊彦氏と共に、三人でお話を伺いに行った。

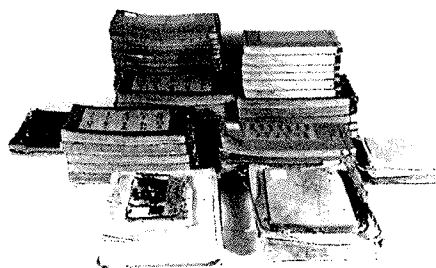
岡崎氏の話によると、「町内の方が持つていらつしやったものです。その方は吉村嘉宏さんと言い、お父さんの嘉穂さんが所持しておられたもので、宮島を離れるにあたり、預けていかれたものです。展示しているものの他にも、未整理の台本等がかなりあります。吉村嘉穂さんは、ロクロ職人で、八月中旬、厳島神社の社前で行われる玉取祭の宝珠を、何年も作られたといっています。その一方で、四月中旬に行われる神能の時、狂言を演じられていましたが、いつの頃からかお出にならなくなったそうです。他の人と演じ方が違うというのが理由だとも聞いています。吉村さんは、安部という狂言を演じられる方が大阪に出入りして、その後、芸を継承されていたそうです。安部氏の先祖につ

①

いては、厳島神社の後のそり橋近くにある奉獻燈の一つに、安部伴蔵と彫られたものがあります。」とのことで、早速、川ぞいの石燈籠を見に行った。そこには、「常夜燈／享保十三年／戊申正月吉日所當／安部伴蔵正治」と彫られていた。その日は、時間もなく、吉村氏寄託資料にはどんなものがあるのだろうかと思いつつ帰途に着いた。

米子工業高等専門学校助教授

永井 猛



その後、調査する機会を得たので、内容検討等不十分ながら、どういう能楽関係資料があるのかを知っていたたくのを主目的として、御報告したいと思う。誤読、思い違い等、多々あると思うので、不備な点、御叱正を賜れば幸甚に思う。

なお、寄託資料には、能関係以外のもの、また、狂言装束などもあるが、ここではそれらを一切省略し、能楽関係の文献資料に絞って紹介して行く(写真①)。

能楽関係文書と言っても、狂言の演者であった方の所持されていたものだけに、狂言関係が主体をなしている。数は三十四点と少ないが、伊藤源之丞吉高筆狂言台本のように、今まで内容の知られていなかった「似鐵法」をはじめ百七十曲という多くの狂言詞章を伝える資料的価値の高いものもあり、また、芸能の地方伝播のあり方、地域の独自

性等を考えていく上で貴重な資料を提供してくれるものが多数ある。

書写年代としては、江戸中期以降のものがほとんどで、筆者についても未詳ながら、安部新七、伊藤八之介は大蔵八右衛門派と言え、他の人々もおおむね大蔵流の芸系に属すると思われるのだが、確かなことは今後の研究に待ちたい。

筆者として、安部伴蔵正治、安部新七、また、伊藤源之丞吉高、伊藤源蔵、伊藤作吉、伊藤八之介と同姓の者が見られ、伊藤源之丞吉高筆狂言台本に「安部新七求之」とあるので、伊藤家の文書が安部新七のもとに入り、さらに吉村家に引き継がれていったものと思われる。聞くところによると、安部と吉村の両家は親類関係にあったという。

宮島の能は、江戸時代、喜多流だったと言われるが、寄託本の多くは金剛座付狂言の大蔵八右衛門派のものであり、江戸中期以後、金剛の影響も考えられる。明治になって八右衛門派廃絶後、狂言は大蔵流の山本家、茂山家の傘下に入っていたらしいが、これらの調査も今後の課題である。

調査に際し、吉岡館長をはじめ、資料館の方々に多大の御便宜をはかっていただき、特に学芸員の高橋修三氏にはひとかたならぬ御甚力を賜わった。記して厚く感謝の意を表したい。

## 凡例

一、吉村氏寄託能楽関係文書三十四点を〔狂言台本〕、〔間狂言台本〕、〔伝書〕に分類した。記載順序は、特に規準を設けていない。

一、見出しの書名は、仮に名付けたもので、筆者・成立年代等の詳しい考証をしたものでなく、あくまでも仮称である。

一、各資料には、資料館の分類ラベルが貼られており、その番号は、かつて書きで、上部に記した。中にはラベルのないものもある。

〔狂言台本〕

1、伊藤源之丞吉高筆狂言台本 十七冊（170曲）

タテ 140mm ×ヨコ 220mm。藍表紙中型横本。17冊。各10曲ずつ所収。題簽は大きく、所収曲を記入。「十三」の冊は題簽剝落。各冊の終りに署名があり、「国文大夫吉高」、「安倍新七求之／源之丞吉高」（六）、「伊藤源之丞 拾九歳二而書之」（十二）など見え、これから筆者が伊藤源之丞吉高と判明する。「国文」とは「小公文」の宛字であろう。角裂れに朱で番号を記し、背に所収曲名の一字ずつを「福栗茶米拔若鮑唐合」（一）のように並記。17冊のうち、角裂れが剝落して番号不明のものが4冊、番号の分かるものが12冊、残り1冊の表紙右上には「大外」との朱注がある。「大外」の冊の背には何も書かれていない。この「大外」に収められている10曲とも、大藏流にもとまないか、明治以後復曲され当時中絶していた曲、また廃曲となつたものなどである。「三」の冊の目録にも「大外」との注記のある「吟三郎聲」「懷中聲」があるが、「吟三郎聲」の曲名は鷺伝右衛門派にのみ見えるものであり、「懷中聲」も虎明本以後、大藏流では廃曲になつてゐるものである。これから「大外」とは大藏流以外の曲という意味で使われているのではなからうか。伊藤源之丞についての調査が待たれるところである。各冊の分類規準はつきりせず、規準を示すものは目録、本文中にない。17冊170曲と曲数が多く、詞章にも独自のものがあり、「似儼

(103) (95) (96) (100) (99) (94) (101) (105)

法」（大外）といった珍しい狂言（実は、鷺流「小傘」の内容とほぼ同じ。橋本朝生氏の御指摘による）を収めている点で貴重な資料といえる（写真②）。所収曲は、題簽（「十三」は目録）によると次の通りである。角裂れ剝落のため番号不明のものは「？」とした。各曲に簡単な装束付等があり、所どころに朱注がある。

一、福の神、栗田口、茶壺、若市、ぬけから、煎物、米市、鮑丁聲、唐相撲、合柿（108丁）

②

二、胡大黒、子盗人、鈍太郎、連哥盗人、鬪罪人、宗論、梟、節分、膏藥煉、薩摩守（107丁）

三、末廣かり、たこ、塗師、祐善、ひくさた、枕物狂、衆阿み、通円、吟三郎聲、懷中聲（69丁）

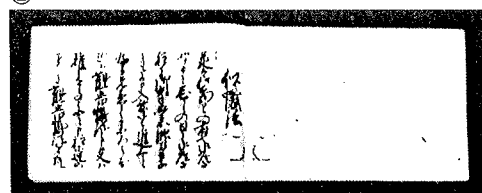
四、清水、胡毘沙門、連哥毘沙門、大黒連哥、布施無經、餅酒、柑子、二千石、萩大名、盆山（101丁）

五、賽の目、かなつ、仏師、鬼継子、名取川、政頼、松脂、瓜盗人、河原太郎、二人大名（72丁）

六、墨塗、鱸包丁、花折、三人片輪、文蔵、あかゝり、法師か母、水掛聲、矢尾、伯母か酒（79丁）

十、三人夫、いもし、横座、禁野、舍弟、酢生姜、髭矢倉、柿山伏、吃、鏡男（84丁）

十一、文相撲、人馬、鍋八撥、鞍馬参、胸つき、栗やき、



(108) (109) (107) (97) (102) (106) (93) (98) (104)

飛越、因幡堂、吟簪、悪房 (83丁)

十二、老武者、筑紫奥、牛馬、蚊相撲、鼻取相撲、今參、

秀句からかさ、雁盗人、鬼瓦、隠れ笠 (94丁)

十三、首引、呂連、骨皮、靱猿、三本柱、金岡、犬山伏、

長光、こふ柿、とふかつちり (93丁)

十四、真奪、鎧、岡太夫、鐘の音、鶏流、引舗簪、鶏簪、

雁かり金、不聞座頭、土筆 (80丁)

十六、素袍落、八幡前、縄ない、八句連哥、成上り、伯養、

口真似、志頭法角、磁石、いくる (85丁)

大外、児流鎗馬、松はやし、みかつき、はくろう、泣あま、

柑子俵、鶏猫、木六駄、右流左止、似せん法 (81丁)

? 麻生、千とり、かに山ふし、富士松、千切木、渡簪、

悪太郎、二人袴、入間川、めちか (100丁)

? 宝の槌、雁磔、猿座頭、腹不立、神鳴、惣八、引く、

り、こふ賣、ふす、しひり (83丁)

? 狐塚、そらうて、棒しはり、祢宜山伏、腰祈、地藏舞、

御茶水 水波トモ、朝比奈、太刀奪、文山達 (87丁)

? やせ松、索化、鎌腹、右近左近、舟ふな、花論、ぬら

ぬら 竹生島参トモ、ほうく かしら 北野参トモ、いろは、竹の

子 (69丁)

なお、この台本の成立年代、流派は今のところ分かっていない。ただ、「狐塚」の「鳴子小哥」のところに別筆で小歌が追加され、それに「文政十一子二月十六日書入、伊藤源蔵 ??? 蔵 ???」とあるので、文政十一年より以前であることは判

(80) (79) (78)

## 2、大蔵虎光本 (転写本)

十五冊、(153曲)

明している。また、内容から大蔵八右衛門派のものと思われるのだが、確かなことは、今後の調査に待ちたい。

タテ 135mm × ヨコ 222mm。薄青表紙中型横本。各冊共に題簽があり、所収曲名を記し、左下に「一」「十六」の番号を付す。「十三」の冊はない。背に各所収曲の一字を並記。「一」と「九」とは背でなく地に記している。また地に番号を付している。「十六」は十三曲所収、それ以外は各十曲所収。「十六」の最後に「右三番外狂言／文化三寅十一月／道遊八右衛門代二書上ル」とあり(写真③)、虎光本の転写本と知れる。吉田幸一氏蔵の虎光本と比較したところ、「十六」の「唐相撲」が欠けているだけで、後は配列も全く同じである。筆者については何の記載もない。安政三年安部新七署名虎光本「十六」と同筆である。目録はなく、役名等ところどころに朱注がある。片面12行書き。

一、末廣かり、竹生島参、祐善、素袍落、福の神、牛馬、栗田口、朝比奈、鏡

男、花折 (67丁)

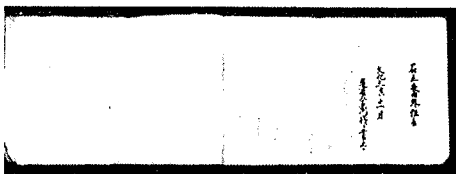
二、麻生、しひり、楽阿弥、三人片輪、

米市、二人袴、入間川、不腹立、栗

焼、清水 (71丁)

三、目近、いろは、二千石、吃り、骨皮、

八幡前、昆布賣、鈍太郎、柿山伏、



③

(92) (91) (90) (89) (88) (87) (86) (85) (84) (83) (82) (81)

髭櫓 (69丁)

四、三本柱、文蔵、蛸、縄なひ、千鳥、雁かりかね、口真似、御茶の水、長光、空腕 (69丁)

五、蛭子大黒、不二松、布施無経、右近左近、附子、鍋八撥、蚊相撲、政頼、止動方角、惣八 (68丁)

六、大黒連歌、北野参、武悪、飛越、磁石、引敷簪、鴈磔、猿座頭、鬼継子、合柿 (59丁)

七、連歌毘沙門、舟ふな、鱸庖丁、茶壺、拔殻、今参、花争、塗師、居杭、芯奪 (57丁)

八、胡毘沙門、察化、連歌盗人、膏藥煉、首引、昆布柿、二人大名、八尾、鎌腹、盆山 (66丁)

九、松脂、鼻取角力、井かつちり、鬪罪人、水掛簪、文相撲、輝、宗論、竹の子、河原太郎 (66丁)

十、寶の槌、鴈盗人、祢宜山伏、横座、千切木、賽の目、雞泣、節分、土筆、犬山伏 (62丁)

十一、鎧、墨塗、い文字、狐塚、薩广守、庖丁簪、棒縛、通圓、胸突、梟山伏 (59丁)

十二、餅酒、柑子、伯養、鐘の音、太刀奪、煎物、鞆猿、法師母、不聞座頭、酢姜 (60丁)

十四、船渡簪、秀句傘、名取川、八句連歌、雷、三人夫、禁野、悪太郎、引括、若市 (64丁)

十五、音曲簪、因幡堂、悪坊、文山立、金津、筑紫奥、萩大名、瓜盗人、佛師、伯母酒 (58丁)

十六、雞簪、子盗人、地藏舞、成上り、老武者、連尺、茸

山伏、盲女座頭、芥川、清水毘沙門、角水、鈍言草、泣尼 (62丁)

(58) 3、安政三年安部新七署名虎光本(転写本)「十六」一冊(13曲)

タテ 139mm × ヨコ 224mm。紺表紙中型横本。題簽に13曲の曲名を記し、「十六」と記す。前記の十五冊本と同筆で、「十六」の冊と所収曲、配列は同じ。最後に「安政三年<sup>辰</sup>五月、新七調之」とあり、裏表紙に「安部」と署名がある。58丁。片面12行書き。

(73) 4、十番綴狂言台本 一冊(10曲)

タテ 150mm × ヨコ 228mm。中型横本。表紙は表、裏ともに剝落。どの所に茶色の紙表紙の破れ残りがある。片面12行書き。十五冊本の欠本である虎光本「十三」所収曲を記載しており、虎光本転写時に写せなかったものを後に記したもののか。虎光本と記載順は異なる。役名などに朱。墨付46丁。目録は次の通り。

鞍馬参り、蟹山伏、腰折、隠笠、人馬、舍弟、鬼瓦、呂蓮、瘦松、岡太夫

(59) 5、天明五年狂言台本 一冊(7曲)

タテ 140mm × ヨコ 195mm。中型横本。半紙を貼り合せた表紙。75丁。題簽なく、「狂言集」と墨書。目録は次の通り。

一、花争、二、いろは、三、文蔵、四、柑子、五、舍弟、六、鞍馬参、七、しひり

「一、花争」と「五、舍弟」は16行書き、残りは8行書き。最後に、「天明五年<sup>巳</sup>正月吉日」とある。佐伯助五郎忠顕署

名狂言小舞と体裁が似ている。

(40) 6、大蔵流「花子・釣狐(付、布施無経拔書)」 一冊(3曲)

タテ 140 mm × ヨコ 225 mm。格子模様水色表紙中型横本。35丁。片面12行書き。朱にて役名、型付を記す。「花子」の本文の後に装束付を付し、その中に「同替」として「此分道徹弥右衛門殿ヨリ始テ本家ニアリ此方ニテハ不致」とあるので、大蔵流の分家筋のものであることが知られる。「花子」の次に、「布施無経」の教化の文句を記し、「倉谷八三郎伝久留米井上市郎右衛門書附写し」との注記がある。倉谷八三郎は大蔵流狂言師で、初代は文化二年没、詞章等の改正で知られる。井上市郎右衛門の名は23にも見える。「釣狐」は、初めに「釣狐十八ヶ條之習」を記し、本文を続ける。「花子」は7と同内容である。

(42) 7、大蔵流「花子」 一冊(1曲)

タテ 192 mm × ヨコ 135 mm。仮綴本。表紙剥落。31丁。片面5行書き。型付等を朱注。前本所収「花子」と同内容。

(68) 8、大蔵流「朝比奈」の責め 一冊(1曲)

タテ 125 mm × ヨコ 170 mm。仮綴本。見出しに「朝比奈セメ」として、責めの型を記す。墨付4丁。最後に「明治廿五年十月 山本大先生從受之」とあり、横に「今東次郎ノ親也」と別筆の注がある。山本東次郎は大蔵流狂言師。

(49) (54) 9、『絵入狂言記』 版本六冊

タテ 122 mm × ヨコ 177 mm。小型横本。黄色表紙に赤地の題簽を貼り、「絵入狂言記」と題している。二、三、四のみに題簽はあり、

残りは剥落。刊年は「嘉永元年<sup>戊申</sup>七月」。

(64) 10、佐伯忠顕筆狂言仕舞仕形附 一冊(70曲他)

タテ 138 mm × ヨコ 200 mm。のどの所に茶色布表紙の破れ残りがある。77丁。片面11行書き。最終丁の破れ残りに「天保八<sup>西</sup>正月舟弁」と見え、またメモ用紙に「天保八年に書かれた『仕舞の手附』佐伯助五郎忠顕」とあって、不思議に思っていたが、他台本を調査中、最終丁の破れた方の紙片が見つかり、それに本文と同筆で「佐伯忠顕」とあった。ただし「舟弁慶」のみは本文と別筆である。詞章の一部を記し横に朱で型附を注記している。目録はなく、内題によると次の通りである。括弧内は仕舞仕形附のみ。

伊文字、今参、八句連歌、二千石、若市、鶏聾、法師母、簪、茶壺、地藏舞、千切木、千鳥、音曲聾、厂かり金、神鳴、鐘音、大黒連哥、宝槌、蛸、連哥毘沙門、連哥盗人、通門、筑紫奥、名取川、樂阿弥、老武者、靱猿、栗焼、鞍馬参、八尾、松脂、枕物狂、松樸、文山達、瓜賊人、福神、文蔵、二人袴、二人大名、昆布売、昆布柿、妄座頭、夷毘沙門、胡子大黒、麻生、合柿、悪太郎、悪坊、朝比奈、栗田口、三人夫、賽目、三本柱、狐塚、清水毘沙門、祐善、目近、宗論、水汲、秀句傘、比丘貞、引敷聾、人馬、髭矢倉、餅酒、煎物、節分、政頼、鱸鮑丁、末廣、(三段舞、胡

(63)

11、佐伯助五郎忠顯署名狂言小舞

一冊 (19曲)

子難舞働、毘沙門同、大国同、翔、羯鼓、二段目合打、棒遣、責初段、楽、舟弁慶替間舟哥  
タテ 140 mm × ヨコ 205 mm。虫損のため表紙も欠け、題簽はなく「狂」の字が残る。28丁。天明五年狂言台本と体裁がよく似ている。目録の前丁に「佐伯忠顯」とあり、最後にも「佐伯助五郎忠顯」とある。片面6行書き。目録は次の通り。

土車、雪山、泰山府君、七人狸々、鵜飼、海人、道明寺、景清、放下僧、細布、宇治晒、駿河舞、鎌倉舞、定家葛、明星、柴垣、小弓、兔、(狸々)(景清クセ)

(67)

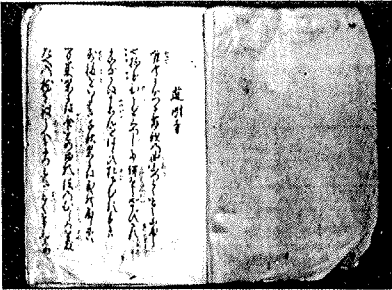
12、安部伴蔵正治筆写狂言小舞

一冊 (16曲)

タテ 290 mm × ヨコ 167 mm。半紙本。13丁。朱にて型附。最後に「九月三日 安部正治写之」とあるので、厳島神社の奉獻燈に「安部伴蔵正治／享保十三年／申戌正月吉日所當」と刻まれる安部伴蔵正治の筆写と認められる。目録はなく、内題によると次の通り(写真④)。

道明寺、景清、放下僧、海人、つち車、う治のさらし、七ツに成子、駿河舞、うかひ、はること、いと物ほそぎ、明星、あんをやま、はち小ゆみ、住吉詣、花子諷ノ仕形

④



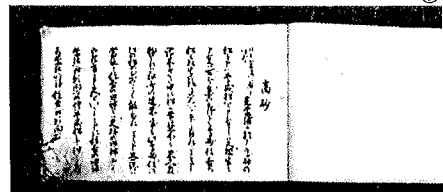
13、天保七年伊藤作吉筆写間狂言台本

三冊 (20曲)

タテ 136 mm × ヨコ 227 mm。白布表紙中型横本。片面12行書き。漢字の読み等を朱注。三冊目の最後に「天保七丙申年葉月於京都師家秘書写取所書物也 伊藤作吉(花押)」とある。各冊の目録は次の通り。曲ごとに番号がついているが、三冊通して、丁ごとに朱で番号を付けているのに対応する。番号は一丁ごとに正確にはつけられていない(写真⑤)。

〔間狂言台本〕

⑤



(70)

第一冊(墨付64丁)

1 高砂、2 老松、3 弓八幡、4 志賀、5 放生川、6 岩船、7 呉服、8 芳野、9 淡路、10 御裳濯、11 佐保山、12 右近、13 松尾、14 草薙、15 葛城加茂代主、16 放生川、17 岩船、18 白楽天、19 加茂、20 白髭、21 嵐山、22 源太夫、23 鶴祭、24 富士山、25 寝寛、26 和布刈、27 九世戸、28 道明寺、29 難波、30 養老、31 氷室、32 玉の井、33 竹生島、34 金札、35 東北朔、36 繪馬、37 大社、38 雨月、39 江の嶋、40 浦島、41 合甫、42 逆鉾、43 代見、44 鶴亀、(同)西王母、45 鷺、(同)皇帝、(同)田村、46 籠、47 八鳥、48 兼平

第二冊(墨付88丁)

49 通盛、50 實盛、51 忠度、52 頼政、53 知章、54 碓潜、55

(71)

敦盛、56巴、57野々宮、58芭蕉、59井筒、60半菰、61夕顔、62江口、63六浦、64東北、65采女、67玉葛、68藤69三山、70祇王、71佛原、72落葉、73檜垣、(同)伯母捨74定家、78胡蝶、79須广源氏、80陀羅尼落葉、81空蟬、82誓願寺、83浮舟、84雲林院、85小塩、86龍田、87梅枝、88遊行柳、89女郎花、90葛城、91錦木、92舟橋、93阿漕、93松虫、94鵜飼、95鷗、96野守、(同)項羽、97熊坂、98鐘、(同)融、99當摩、100唐船、101百萬、102西行桜、(同)花月、103班女、104小督、(同)愛染川、105竹雪、106邯鄲、(同)俊寛、107蟬丸、(同)鳥追舟、108黒塚、109山姥、110盛久、111天鼓、112藤戸、113三井寺、114吉野静、115國栖、116大江山、117正尊、118船辨慶、119七騎落、(同)雲雀山、(同)鉄輪、120土車、(同)綾鼓、121束岸居士、122自然居士、123禪師曾我、(同)小袖曾我、(同)調伏曾我、124元服曾我

## 第三冊 (墨付77丁)

124高野物狂、(同)烏帽子折、125礎、126護法、(同)満仲、127摂待、(同)千引、128常陸帯、129鶏龍田、130籠祇王、(同)水無瀬、131忠信、(同)戀重荷、132大原御幸、(同)木賊、133二人静、(同)車僧、134春日龍神、135朝長、136求塚、137谷行、138冬海人、139豊干、140吉野天人、141第六天、142鱗形、143大瓶狸々、144愛宕空也、145雷電、146殺生石、147舍利、148小鍛冶、149飛雲、150龍虎、150大蛇、151張良、152土蜘蛛、153羅生門、154弦生、155是界、156現在鶴、157鉢木、158檀風、159紅葉狩、160輪藏、161三笑、162室君、(同)三輪、163大佛供養、164関原

## 14、伊藤源之丞吉高署名間狂言台本 一冊 (49曲)

与市、(同)夜討曾我、165橋辨慶、166鞍馬天狗、167葛城天狗、168大會、169咸陽宮、170松風、(同)楊貴妃、171芦刈、170烏頭、善知鳥共言、172葵上、(同)巻絹、173放下僧、174弱法師、(同)籠太鼓、175春栄、(同)藤永、176安宅、(同)住吉詣、176双紙洗、179富士太鼓

タテ 138 mm ×ヨ 220 mm。押出模様白表紙中型横本。題簽剥落。墨付55丁。最後に「吉高」と署名があるが、曲によって手が違うので、伊藤源之丞吉高一人の手になるものとは思えず、数人の者によって書き継がれたものである。目録は次の通り。

箏太鼓、頼政、三山、絵馬、恋重荷、現在熊坂、植田、久世戸、舍利、摂待、七人狸々、石橋、藤永、金札、松浦鏡、東心房、千人切、室住、涿瀨タケノセ、祚国まこく、駒形狸々、狸々、村山、丁固ていこ、葛城天狗、白樂天間鶯蛙、船弁慶替間、養老間薬水、輪藏間はちたゞき、鱗形、谷行、大瓶狸々、源氏供養、籠祇王、満仲、木賊、護法、水無瀬、小袖曾我、関原与市、豊干、吉野天人、陀羅尼落葉、合浦、忠信、空腹とも、雷電、三笑、寝覚、代主、(経政)

なお、目録にない「経政」が追加されているが、それには「天保二卯三月六日佐伯助五郎書物之内写筆者小田忠兵衛」との注記がある。また、表紙の見返しに、目録の「籠祇王」以下の16曲の題名を書き、「此分書入目録 八之介」と記す紙片を貼付している。この16曲は伊藤八之介の筆であろう

か。目録の「絵馬」には「九二有」と注記があつて本文がない。これから、もとは九冊以上の揃本だったと思われる。

(62) 15、嘉永七年村田為蔵筆写「那須」 一冊(1曲)

タテ 199mm×ヨコ 132mm。仮綴本。表紙に「那須」と墨筆。表紙とも7丁。片面7行書き。裏表紙に「嘉永七寅年六月十三日伝授之節於深川写之村田為蔵」とある。「八島」の間狂言。

〔伝書〕

(65) 16、『大蔵流伝書』 一冊

タテ 193mm×ヨコ 135mm。紺表紙剥落。のどの所に残欠。66丁。「大蔵流伝書」との内題がある。内容は、風流、三番三、小舞、間狂言など多岐にわたる心覚えと、笛の譜、「江島」「龍田」などの間狂言詞章等。虫損が激しい。途中、「天明三癸卯年正月大蔵八右衛門 虎(花押)」とあり、「原勘五郎」「原氏方伝」などに見える。内容の一例をあげると「一、風流十八番一子相伝ニ有之候然共御三家方加州薩州奥州御家督御入国之節於御国御願之上相勤候儀無抛伝受致来候京都禁裏御用斗格外一兩人伝受致来候事」など一つ書きになっている(写真⑥)。

(47) 17、大蔵八右衛門派「習狂言 同間 覚」 一冊

タテ 125mm×ヨコ 170mm。仮綴本。表紙を含めて6丁。表紙に「習狂言 同間 覚」と墨書。各曲の伝授料等を記す。最後に「国楽長狂言太夫八世大蔵八右衛門 秦虎雄改正」「嘉永四年寅十二月伊藤八之介」「宮しま岡部吉三郎様」「安政五年午二月新七調

之」とある(写真⑦)。

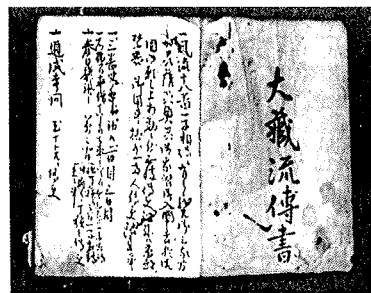
(45) 18、大蔵流「狂言・間語・小舞 順番之控」 一冊

タテ 245mm×ヨコ 165mm。青磁色布表紙。中央の題簽には何も書かれていない。内題に「小舞 間語狂言順番控」とある。書中に「大蔵弥三右衛門」などの名が見えるので、大蔵流のものであることが知られる。曲名をあげ、相伝順等を△・の印で示す。

(44) 19、大蔵流名寄 一冊

タテ 128mm×ヨコ 220mm。小型横本。焦茶表紙。7丁。「胡毘沙門」以下の曲名を列記した後に「都合百六拾番／外二家元ヨリ書上ケ之分五番」として「しみづ毘沙門、くさびら、盲女座頭、芥川、れんじやく」を記す。この五曲と享保九年大蔵八右衛門書上の珍敷狂言五曲とが一致するので、この名寄が大蔵八右衛門派のものであることが分かる。また、

「同弥右衛門ヨリ書上ケ之五番」として「西翁、松樸、花盗人、樋の酒、まんぢう」をあげ、「外狂言」として「石神」以下の三七番と、狂言面一七面を付記する。



## 20、謡名寄・大蔵流狂言名寄・沢庵「山姥の歌」 一帖

タテ 154mm × 80mm。小型折本。灰地に黒の刷り模様表紙。題簽に「謡名寄 大倉流狂言名寄 裏二山姥謡澤庵注有」とある。料紙は、布目入銀地に鶴に笹、草木、柴を荷なう男、小鳥に家、松に繋がれた馬などが刷られた華美なものである。謡名寄は一折ごとに五曲三段に記し、曲によつては「上々、上、中ノ上、中」との位付が右肩に付けられている。(写真⑧)。「高砂」から「愛染川」までの曲名の後に「合百六拾四番 右之目録高安道様ノ写」と記し、「外」として「志賀 鵜祭」を追記する。高安道とは、金剛座ワキ方高安家の七代目道也のことであろうか。「狂言目録 大倉流」は、一折ごとに五曲二段に記し、曲名の下に「二、三、四、五、六七、七八、八九」の番号を付す。「夷毘沙門」から「水くみ」まで一二七曲。途中で終っているのか、当然あるべき曲名が見えない。年代等不明。裏には、題簽にある通り「抑山姥 定りて山姥といふものはなし、心の変化これといふなり」などの歌がある。これは、延宝五年刊『沢庵和尚 山うばの哥<sup>並</sup> 百首』の写しであろう。これに続き、「謡の文字四座にかはり有事」の記事がある。以上は同筆。この他、別筆で謡名寄の後に「弓矢幡」の曲名と、俳諧と和歌が一つずつ書かれている。また、狂言名寄の後に「寛政十一年末三月御神事能番組」として、初日、二日、三日各能五番ずつが書かれている(写真⑨)。裏の最後にも能の曲名を列記している。表紙裏に「宮島 杉山利三郎」、また、

(77)

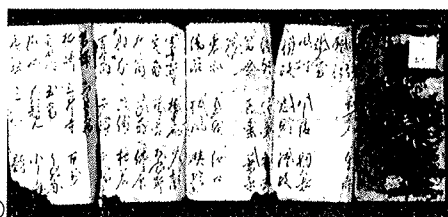
## 21、大蔵流「能聞衣装附」 一冊

裏の最後に「寛政十一年末二月吉日 杉山零助」とあるが、謡名寄等とは別筆である。杉山家は、ワキ方として宮島の能を支えた家らしい。

タテ 140mm × ヨコ 225mm。中型横本。樺色表紙。

題簽に表記の如く書名がある。42丁。

「岩太郎」「鹿島詣」といった遠い狂言の装束付もあり、「右狂言ハ都合百六拾番也」とした後、「比丘貞 枕物狂 浦島 花子 釣狐」の曲名をあげ、「右五番重キ習事ニ付奥ニ印」とする。最後に「右之通江戸大蔵ニテ」とあつて、大蔵流のものであることが知られる。



⑧

( )

## 22、喜多流「翁」 一冊

タテ 245mm × ヨコ 170mm。仮綴本。共表紙に

「喜多流 翁」と題記。7丁。「翁」

の謡と型付を記したものの。朱注がある。

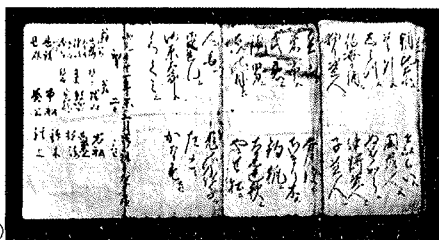
(41)

## 23、天保三年井上市郎右衛門筆「三番三手附」

並口伝書

一冊

タテ 260mm × ヨコ 195mm。紺地押出模様表紙。題簽剝落。21丁。片面8行書き。見出しは、「初日三番三手附」並口伝書「下掛



⑨

(61)

24、安永七年三好唯清筆写『翁大事』

一冊

タテ 250mm × ヨコ 172mm。半紙仮綴本。表紙に「翁大事」と墨書。

(写真⑩)。表紙とも17丁。途中に「安永三年<sup>甲午</sup>冬十一月五日

日<sup>成</sup>津成七十四翁松岡仲良<sup>張良</sup>雄淵<sup>在判</sup>とあり、最後に「安

永七歳<sup>成</sup>閏七月二十二日 三好唯清謹而書写之」とある。

安永三年に松岡仲良が「翁」と、その詞章について考察を

加えたもので、後に「玉方陣」のことが書かれている。松

岡仲良（一七〇一〜一七八三）は、神道学者。

(60)

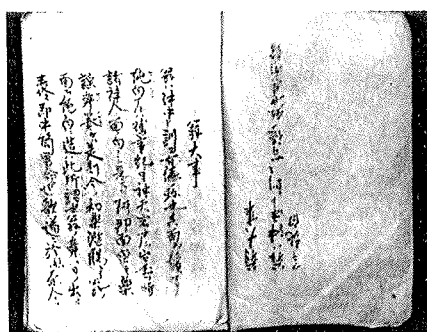
25、安永十年村井守章筆写「翁注釈」

一冊

タテ 240mm × ヨコ 170mm。茶表紙半紙本。題簽はない。13丁。内容

は前書と同じく、「翁」とその詞章について解説したもの。

「仲良曰」と松岡仲良の説を引き、「好虎按二」との説を加



⑩

(55)

27、天保二年伊藤源蔵筆写「謡鏡」

一冊

タテ 205mm × ヨコ 183mm。紺地布表紙。墨付45丁。謡いの心得を記

す。目録に「謡鏡」として「一、五音清濁」から「一、十

二調子聞分図」の三十ヶ条があげられている(写真⑪)。奥

書きから「宝暦六子」に「大島某」

が「観世家」の書を写したものを

転写したもので、「天保二年<sup>辛卯</sup>二

月七日写調 藝州嚴島小公文太夫

伊藤源蔵敬書」とある。鴻山文庫

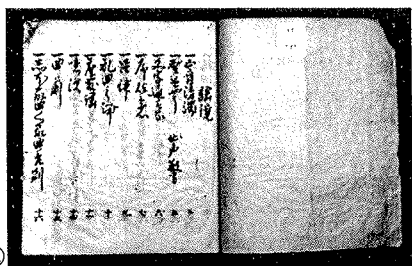
に寛文二年刊『うたひ鏡<sup>上</sup>』の写し

(「謡鏡集」)が所蔵されているが、

それと内容が一致する。版本は三

冊本だったらしく、その一部を写

したものであろうか。また、観世



⑪

(57)

26、嘉永六年安部新七筆写「翁等の習い」

一冊

タテ 140mm × ヨコ 225mm。仮綴本。表紙はない。墨付5丁。内容は、

翁、千歳、三番三、狂言等の習いについて、最初は「日本

書記通證二有之」との引用文を載せ、その終りに「嘉永六

年<sup>丑</sup>極月四日調之」として一応、区切りをつけ、後、一つ

書き形式で口伝等を書きつけている。奥書きに「一、安部

伴蔵<sup>（採得）</sup>と豊宮新之丞承之<sup>（但シ伴蔵ト云ハ一東ノ京也）</sup>／

嘉永六年丑十一月廿一日 安部新七写之」とある。

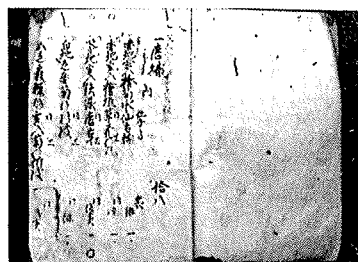
家に別の写本があつたのであろうか。

(48) 28、『能笛譜』 一冊

タテ 138 mm × ヨコ 227 mm。 仮綴本。表紙に

「能笛譜」と墨書。8丁。見出しには「楽、富士太鼓、唐舟、邯鄲、神楽、序舞、中舞カトリ、湯谷、松風、サガリハ、カツコ」とある。

朱注があり、「コイ」「ツツケ」「ナガシ」などと記す。



⑫

(72) 29、笛の譜 一冊

タテ 130 mm × ヨコ 180 mm。 仮綴本。50丁。書名はない。「序舞」から

「ヒョリリヤアヒヨイ ヒヨリイリ」という具合に丁寧な書かれている。

(56) 30、文化二年再刻『八拍子』 版本一冊

タテ 232 mm × ヨコ 168 mm。 158丁。奥附に「安永八<sub>己</sub> 亥 季孟春 平安山

常綱」「文化二年正月再刻」とある。「高砂」以下25曲の囃子方の拍子のとり方を記したもので、安永八年以後、繰り返し出版され、明治33年には活字本で出されている。上中下の三冊本が多い。

(66) 31、厳島神社の能装束目録 一冊

タテ 243 mm × ヨコ 175 mm。 半紙本。73丁。内容は能装束の目録を記したもので、所蔵者の方のメモに「厳島神社の能衣装目録」とある。「(文政三年<sub>庚辰</sub>三月改)一、唐織 拾八」以下、一点ずつの色、模様等が記されている(写真⑫)。中に「狐毛

皮」の注記に「此分射狸用ニ可成候、伊藤八之助拝借 戊三月廿日より帰る」などとみえる。

( ) 32、神能観賞のための棧敷割 一枚

タテ 320 mm × ヨコ 480 mm。 舞台を中心とした棧敷割の図で、番号と

席代が記入されている。舞台中央から左側、脇正面、中正面の席の部分、つまり左半分のみが現存している。余白に「谷一平次、石川八十次、小川五左衛門」の名が記されている。江戸時代、毎年三月十六日から十八日までの三日間、

厳島神社の能舞台で法楽神事能が催され、元禄十五年刊の『厳島道芝記』に「廻廊より舞台の前まで海上四方板を張りわたし、棧敷をかまへ諸人群集す」とある、その神能の際の棧敷割と思われる。現在は、「桃花祭御神事能」と呼ばれ、四月同日に行われている。

(39) ( ) 33、『花伝書』(明治35年訂正再版) 活字本一冊  
34、『謡曲玉淵集』(明治36年再版) 活字本一冊

## 資料紹介―「嚴島縁起」(二)―

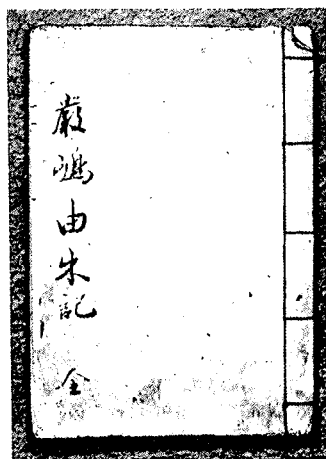
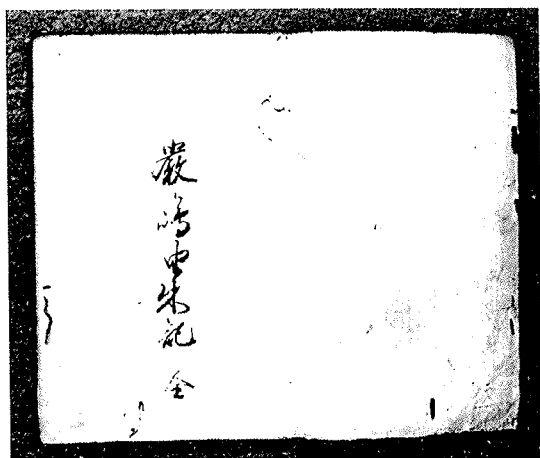
ここに翻刻紹介する資料は、前回に続き、「嚴島縁起」と総称される諸伝本のうちの一本であり、宮島歴史民俗資料館の所蔵資料である。写本で全一冊。縦二四・三センチ、横一六・九センチ。表紙は薄茶地の紙表紙。本文は袋綴で、墨付三五丁、一部を除き一面一行書き。題簽はなく、外題は、「嚴嶋由来記 全」と表紙左端に本文と同筆で墨書(一丁表にも同じく「嚴嶋由来記 全」とあり、裏には「紙数上紙共二三拾八枚」とある)。内題は、「嚴嶋大明神御縁記」とあり本文と同筆。成立年代は、最終丁に「天保三辰ノ三月上旬」の奥書があり、この時のものと思われる。所々に虫喰いはみられるが、全体的に保存状態は良好である。

翻刻にあたっては、虫損の箇所を□で示し、便宜上、読点を施したほかは、いっさい原文の通りとした。

誤読等も多々あるのではないかと思う。御指摘いただければ幸いである。

宮島歴史民俗資料館学芸員

高橋修三



低敷 夜 客

紙数 上紙共二 三拾八枚

嚴嶋大明神御縁記

作嚴嶋大明神と申奉るは、人王三拾四代推古天皇の  
 御宇、端正五年<sup>甲</sup>申九月、日本に遷渡とまします、安藝の国、  
 佐西郡宮嶋に跡をたれ、衆生さい度し給ふ、由来を  
 委ハしく尋奉るに、天竺東城国の帝皇ハ東善大王と  
 申奉る、此君聖皇二<sup>而</sup>萬機のまつり事おこたらす、  
 公卿天上人、月卿雲かく臣下百官等皆、かしつき  
 奉り、君の御恵み深ければ、四民も喜悅のまゆを  
 ひらき、国家も寛に栄へけり、天竺の習ひ、千人の後  
 まします、然ども御代を續せ給ふへき皇子  
 まします、比は弥生中旬、南天の庭に出御あり、

嚴嶋大明神御縁記

抑嚴嶋大明神と申奉るは、人王三拾四代推古天王の  
 御宇、端正五年<sup>甲</sup>申九月、日本に遷渡とまします、安藝の国、  
 佐西郡宮嶋に跡をたれ、衆生さい度し給ふ、由来を  
 委ハしく尋奉るに、天竺東城国の帝皇ハ東善大王と  
 申奉る、此君聖皇二<sup>而</sup>萬機のまつり事おこたらす、  
 公卿天上人、月卿雲かく臣下百官等皆、かしつき  
 奉り、君の御恵み深ければ、四民も喜悅のまゆを  
 ひらき、国家も寛に栄へけり、天竺の習ひ、千人の後  
 まします、然ども御代を續せ給ふへき皇子  
 まします、比は弥生中旬、南天の庭に出御あり、

[illegible]

四方の氣色を御覽するに、しやくせんたんの木枝に、  
つはさ巢を懸ケ、五つの飼子をそたて、同し羽を  
並へ親児の礼をおもんするに、丸は大皇の主なれ  
と、世の末なければ、親子の礼を可知ものなし、鳥類にも  
おとれり、偏神明佛陀の加護を蒙らすんハ有  
へからすと思召、諸神諸佛へ御祈誓あり、感應  
を祈らせ給へハ、千人の後のうち、雲のうてなと  
いゑる后、御懷妊ならせ給ふ、月日重り輒く御安産、  
皇子御端生被成けり、御名をば雲井の皇子と  
申けり、君御寵愛不淺、王子の御盛長、物ニ能々  
たとふれハ、夜半にはゆる竹の子の、明ぼのゝ露に  
尺を延か如く、光陰矢方もはやく、既ニ七歳ニ而  
衣冠を着し給ふ、此君わうめいゑいちニ而、集書  
に御心を寄せ給ひ、王法を守らせ給へハ、諸夏の学問  
ならぶかたなし、拾五歳ニ而御位ニましゝ、善才  
王と申けり、大国の習ひ、先百人の后を備へけり、  
然ルに此内裏に拾貳代傳り、御寶物扇子三本有り、  
壹本ニハ世界の繪圖を写し、居ながら大千世界  
を目之前ニ見る如シ、壹本はこんでいの法花經  
を寫写ス、壹本は天下無双の美女を畫たり、  
大王此扇子を朱ぬりの箱ニ納め、常に御身を  
放し給ハす、善才王、此扇の美女の繪姿を何としてか

[illegible]

けるは、是より西天竺に當つて、西城國帝天  
天王と申二ハ、御子数多持給ふ、第三の姫宮足  
曳之宮と申て、天下無双の美女と承り及ふ、御文の  
屈事ならハ、返更の有せもかなと待給ふ間ニ、御惱  
御快氣有へきやと申けり、又ある臣下申けるハ、  
西城國へは片道六年往とかや、往来拾貳年の間  
待更成難し、爰に幸の事あり、此帝ニ貳拾壹代  
傳ハる五鳥と言御宝物あり、頭は白シ、羽ハ黒し、  
身ハ青し、口ばし赤し、足ハ黄也、則五鳥と  
申也、常ハ箱に入寶藏ニ納り有、君大更出來の  
時は働き、物言イ智恵才覚の人の如し、一方の

五月やミ音つれて来る郭公  
恋するまろに聲な聞せそ  
と詠したまふ、公卿大臣、付給ふ御玉章  
遊し給へとすゝめければ、君もなゝめに  
思召、妻恋ふ鹿の命も恋の文書、筆を染紅  
のたんしにて、一首御歌に

五月やミ音つれて来る郭公  
恋するまろに聲な聞せそ  
と詠したまふ、公卿大臣、付給ふ御玉章  
遊し給へとすゝめければ、君もなゝめに  
思召、妻恋ふ鹿の命も恋の文書、筆を染紅  
のたんしにて、一首御歌に

五月やミ音つれて来る郭公  
恋するまろに聲な聞せそ  
と詠したまふ、公卿大臣、付給ふ御玉章  
遊し給へとすゝめければ、君もなゝめに  
思召、妻恋ふ鹿の命も恋の文書、筆を染紅  
のたんしにて、一首御歌に

御用ニ立こと、上古も例しも有、殊に飛行自在成レハ、  
西城國へ御文の使いたさすへし、善才王へ斯と  
申上ければ、けにもと思召、御惱も少し快然せり、  
時しも卯月はしめつかた、時鳥雲井におとつれ  
けれハ、一首御哥に

五月やミ音つれて来る郭公  
恋するまろに聲な聞せそ  
と詠したまふ、公卿大臣、付給ふ御玉章  
遊し給へとすゝめければ、君もなゝめに  
思召、妻恋ふ鹿の命も恋の文書、筆を染紅  
のたんしにて、一首御歌に

夢にたにまた見ぬ人の恋しきハ  
生れぬさきの契りなるらん  
と詠し給ふ、臣下受取、五鳥にかくと言含め、  
右の羽かいの下ニ御文を納めさせ、心はかうなり、  
飛行は得物、西城國へと急きけり、海上まんく  
として、雲の煙り風浪を凌ぎ、昼は日輪の出入  
ニ而東西を知ル、夜は星を目当ニ明し暮し行程ニ、  
五拾日休ス行時ニ、西方吹来る風荒く、羽もつかれ  
身も草臥心も弱く成ニけり、五鳥海上ニ向ひ、いかに  
龍神聞し召、我は東城國の主善才皇の使ニて西  
城國へ渡る也、いかてか御使空敷海底ニ沈へきや、



病悩保養の手立、いかやうにも叶ふへしと仰二て、  
宮中評定とりくも、臣下大臣評儀極メ、大皇へ  
申上ケ勅を請、千人の大工を召寄せ、楠二而御座船を  
作り、供奉の船も新船に作り立、御親子御暇乞  
の上、若君を乗船させ奉り、綾の帆を上ケ紫の  
幕をうち、供奉の官人船を粧ひ、いらかをならへ、  
船をさ水主梶取、吉日を撰ひ御出舟、西城國へ  
趣き給ひ、数千里の海上を波風凌き漕出ス、有日  
俄に浪風あらく、しんとふらいてんしけれハ、善才王  
初とし、公卿臣下官人船方も、氣も魂も消る  
計也、善才皇せんかたなく思召シ、海の面へ向ひ給ひ

病悩保養の手立、いかやうにも叶ふへしと仰二て、  
宮中評定とりくも、臣下大臣評儀極メ、大皇へ  
申上ケ勅を請、千人の大工を召寄せ、楠二而御座船を  
作り、供奉の船も新船に作り立、御親子御暇乞  
の上、若君を乗船させ奉り、綾の帆を上ケ紫の  
幕をうち、供奉の官人船を粧ひ、いらかをならへ、  
船をさ水主梶取、吉日を撰ひ御出舟、西城國へ  
趣き給ひ、数千里の海上を波風凌き漕出ス、有日  
俄に浪風あらく、しんとふらいてんしけれハ、善才王  
初とし、公卿臣下官人船方も、氣も魂も消る  
計也、善才皇せんかたなく思召シ、海の面へ向ひ給ひ

ますか、ミまた見ぬ君の情こそ  
さき生よりのゑにし成るらん

と遊し給へハ、官女受取彼鳥二渡しけり、五鳥は  
是こそ御文の返事そと、取手も嬉しく立上り、  
雲井はるかに飛行する、帰る道には、磯におり  
山二とまり、食を求め羽を休め、九十日ヲ経て東城  
国王宮へ帰着せり、善才皇江御返事を奉る、  
若君不斜悦ひ御覽し、誠ニ美敷文字の  
習ひ、見る二付ても猶なつかしや、一度あふより  
外二葉はなく、御悩は重らせ給けり、公卿臣下  
大臣驚かせ給ひ、子供の思ひは高下なし、善才皇



善才皇は大王の主、遙かの浪路を凌ぎ是迄の  
客来、争かむなしくかへし参らせん、かうしを隔て、  
一度はま見ゆへしとの御下心、随ふ男女取持二而、  
夜更くに通せ給ひけり、互に見へつ見へされつ、  
ひよくれんりの御情、神ならば結ふの神、佛  
ならば愛染明王と契り給へハ、長き月日も短  
夜の明ほのおしきふ情也、年月重り、式年余り  
過ければ、東城国が供奉の公卿大臣、善才王に  
申上けるは、御国を出御し給ひ式年半二成りけれハ、  
御父大王の御歎きいか計有らん、還御ならせ  
然るへしと申ける、君聞召、汝等か申條理り也、姫に

訓染離レ難く、願は召連帰る手立あらまほし  
やと仰有ル、両国の臣下申合、天一皇の御機げん  
を伺ひければ、岩木ならさる親心、汝等よくに  
計ふへしとの勅定也、姫君二斯と申せば、今更  
に憐みの父上悲しみの母をふり捨て、はるか  
の国へ趣と名残盡せぬ御泪、父の仰といさめ  
られ、用意をこそ被成けり、御娘入の仕立も有へけれ共、  
事急なれば、有合の何のかの迎賑敷、善才王は  
天一天皇御母后へ御對面、姫君は御父母御兄弟  
中江御暇乞、両国之臣下大臣女達夫々二暇乞、  
事なく御乗船有ければ、風二任せて御出船、

秋の玉の海上をり月日流るる戦後、建武  
の御父大王御母后、善才皇足曳の宮二御對面まし  
て、御悦ひは限りなし、宮中上下国民も皆々喜悦  
せり、御父大皇被仰出は、善才皇婦国の用意二千人の  
后を備へ、日毎に不怠、五十人当テ姫宮の館へ参り、  
慰め申せとの綸言を承り、日々二替りて出勤ス、  
足曳の宮を見るに、当りもかゝやく御粧ひ、御姿は  
春の華、御出立をみれば秋の月、十はら十ヲの  
ゆい腕也、瑠璃を延たる如く也、扱后達は、大皇の  
被仰渡を疎畧にして、姫君をねたミ取々なり、  
有時后達一所二集りさゝやきけり、足曳の宮

此宮中にましましては、我等如きは物の数にもいら  
はこそ、何卒君の御目を忍ひ、姫の玉の緒をう  
しない奉らんと工ミしに恐敷、姫宮を調伏せんと  
后達の所意二而雑人を頼ミ、五尺五寸の人形を作り、  
紫の結を着せ、七尺の穴をほり逆様に埋メ、千人の  
后達各赤キ結を着、一時のろいけれ共、元より料  
なき御身なれば、少しも御痛ミまします、有后言  
けるは、千人の後一時に作病を工ミてはいかゝ有へきと  
いへば、此儀然るへしと申、扱、夫方はかせの方へ使の立  
后達の工ミかやうく也、若シ占いかたの御沙汰有は、  
足曳の宮の事悪敷様取成たのむと、千人の後より

数千里の海上恙なく、月日を経て東城國還御

有、御父大王御母后、善才皇足曳の宮二御對面まし  
て、御悦ひは限りなし、宮中上下国民も皆々喜悦  
せり、御父大皇被仰出は、善才皇婦国の用意二千人の  
后を備へ、日毎に不怠、五十人当テ姫宮の館へ参り、  
慰め申せとの綸言を承り、日々二替りて出勤ス、  
足曳の宮を見るに、当りもかゝやく御粧ひ、御姿は  
春の華、御出立をみれば秋の月、十はら十ヲの  
ゆい腕也、瑠璃を延たる如く也、扱后達は、大皇の  
被仰渡を疎畧にして、姫君をねたミ取々なり、  
有時后達一所二集りさゝやきけり、足曳の宮

此宮中にましましては、我等如きは物の数にもいら  
はこそ、何卒君の御目を忍ひ、姫の玉の緒をう  
しない奉らんと工ミしに恐敷、姫宮を調伏せんと  
后達の所意二而雑人を頼ミ、五尺五寸の人形を作り、  
紫の結を着せ、七尺の穴をほり逆様に埋メ、千人の  
后達各赤キ結を着、一時のろいけれ共、元より料  
なき御身なれば、少しも御痛ミまします、有后言  
けるは、千人の後一時に作病を工ミてはいかゝ有へきと  
いへば、此儀然るへしと申、扱、夫方はかせの方へ使の立  
后達の工ミかやうく也、若シ占いかたの御沙汰有は、  
足曳の宮の事悪敷様取成たのむと、千人の後より

少時、病は愈へり、金千両はかせ二取せける、扱后達ハ  
作病ヲ工ミ、一時二病ひの床ニ伏ス、出伺する者もなし、君の  
御用欠ければ、大皇御親子驚かせ給ひ、臣下  
大臣を召寄、占かたの御沙汰有けれハ、勅ニ任せ博士参  
内仕り、八卦に讀雜書を引合、誠にしく占けり、  
今度后達御病氣何共心得かたし、佛神へ  
御祈誓ありても加護も叶ひ難し、薬も相應いたし  
難し、是方北二当て北城国の高峯山と言山ニ、  
人王草と言ふ薬艸あり、その草こそ后達の  
御煩の薬と成へし、去ながら、只人の取ニ行取帰  
ては薬ニならず、善才皇御幸被成、御自身二とらせ

り、是より、御沙汰の如く、御病氣愈へり、  
千人の後不殘命終るへし、そのミ不成、内裏の騒ぎ  
国土の苦ミやんことなしと占ひけり、朝恩を戴くはかせ  
も后達に頼れ、小袖金二ほだされて、まいなやら  
占ひやらさんく二申上げる、かくとは夢にも知り給ハす、  
大皇は善才王を召れ、千人の命助るのミならず、  
上下万民の為なれば、急ぎ彼国へ行薬艸を取帰る  
へし、片道三年往来六年の立二て光陰矢の如し、  
早とくくとありければ、父の仰のおもければ、御請  
申て旅行の用意被成けり、善才王ハ此由を姫君に  
語り給へハ、扱も恨敷世の中也、父母二に別れ国を

小袖千重ね、金千両はかせ二取せける、扱后達ハ  
作病ヲ工ミ、一時二病ひの床ニ伏ス、出伺する者もなし、君の  
御用欠ければ、大皇御親子驚かせ給ひ、臣下  
大臣を召寄、占かたの御沙汰有けれハ、勅ニ任せ博士参  
内仕り、八卦に讀雜書を引合、誠にしく占けり、  
今度后達御病氣何共心得かたし、佛神へ  
御祈誓ありても加護も叶ひ難し、薬も相應いたし  
難し、是方北二当て北城国の高峯山と言山ニ、  
人王草と言ふ薬艸あり、その草こそ后達の  
御煩の薬と成へし、去ながら、只人の取ニ行取帰  
ては薬ニならず、善才皇御幸被成、御自身二とらせ  
られあたへ給ハ、御快氣疑なし、さなき物ならは、  
千人の後不殘命終るへし、そのミ不成、内裏の騒ぎ  
国土の苦ミやんことなしと占ひけり、朝恩を戴くはかせ  
も后達に頼れ、小袖金二ほだされて、まいなやら  
占ひやらさんく二申上げる、かくとは夢にも知り給ハす、  
大皇は善才王を召れ、千人の命助るのミならず、  
上下万民の為なれば、急ぎ彼国へ行薬艸を取帰る  
へし、片道三年往来六年の立二て光陰矢の如し、  
早とくくとありければ、父の仰のおもければ、御請  
申て旅行の用意被成けり、善才王ハ此由を姫君に  
語り給へハ、扱も恨敷世の中也、父母二に別れ国を

御人君の御いふ事もあらうと、  
御留主は致難し、自も御供申さんと歎給へハ、いや、  
彼国は難所多シと聞、供さへ数多つれされハ、足  
弱は思ひもよらず、六年と言も夢の夢、事なく  
待せ給へと有ければ、姫は泪の隙よりも、ありし  
仰の玉水の、よとミ〜にとまりて、只ならぬ身  
いかにと歎き給へハ、君も御泪にくれながら、御父  
大王母后ましく、官女達の情を受け、安産を願ハれ  
よと、自も是のミ心に懸れば、往来急き五年  
半ニハ帰国せん、心強く待給へと、かたミの色々  
残置、供奉の人々友ないて館を<sup>出</sup>出給ひける、

北国へは、  
待迎もかひはあらしな六つとせの  
と詠し給ひければ、善才皇御返哥、  
帰らんと思ふていつる此身さへ

と詠し給いて、北城国へは急かせ給ふ、御父大王  
重て后達江被仰出は、足曳の宮は父母に別レ  
古郷を振り捨て、壱人樂しミ善才皇、他国出行  
の留主なれば、淋しさ限り有まし、武拾人三拾人宛  
屋夜相詰慰さますへしとの綸言也、され共后達ハ、

隔て、君の随ひ、父母共君御壱人を樂ミニ、六年の  
御留主は致難し、自も御供申さんと歎給へハ、いや、  
彼国は難所多シと聞、供さへ数多つれされハ、足  
弱は思ひもよらず、六年と言も夢の夢、事なく  
待せ給へと有ければ、姫は泪の隙よりも、ありし  
仰の玉水の、よとミ〜にとまりて、只ならぬ身  
いかにと歎き給へハ、君も御泪にくれながら、御父  
大王母后ましく、官女達の情を受け、安産を願ハれ  
よと、自も是のミ心に懸れば、往来急き五年  
半ニハ帰国せん、心強く待給へと、かたミの色々  
残置、供奉の人々友ないて館を<sup>出</sup>出給ひける、

姫君御涙にむせひ給へ、一首御歌に詠し給ふ、  
待迎もかひはあらしな六つとせの  
たちなん後や君を見るへき

と詠し給ひければ、善才皇御返哥、  
帰らんと思ふていつる此身さへ

かなしきかなや今朝の明ほの

と詠し給いて、北城国へは急かせ給ふ、御父大王  
重て后達江被仰出は、足曳の宮は父母に別レ  
古郷を振り捨て、壱人樂しミ善才皇、他国出行  
の留主なれば、淋しさ限り有まし、武拾人三拾人宛  
屋夜相詰慰さますへしとの綸言也、され共后達ハ、

君の御留主内ニ、姫君の御命失わんと工ミたる  
 事なれば、さのミかしつき不奉、扱姫君は御身持  
 堅ク御留守を守らせ給ひ、昼は哥道を字はせ  
 給ひ、夜は法花経を御讀誦有り、女人成佛の  
 三部経、并光明真言弥陀の名号夜もすがら  
 不怠、御身方光明かゝやきたり、善才皇の御身の上  
 更なく御帰国有やうにと祈らせ給ふ御心、殊勝二も  
 また痛敷、千人の後達悦ひ、足曳の宮をいか成  
 科二も沈めんと取々評定之上、浅香といへるますら  
 ををかたらひ、金銀取せ頼けるは、姫君のまします  
 御館へ常ニ参り、此哥を讀へしと教けり、哥二

浅香山光りさやけき玉の井の

きはしの陰をやとす姫宮

と書て、浅香は后達の教への如く御殿へ上り、  
 此哥を讀二けり、扱、其後、后達大王の御前へ出  
 申上様は、君の御留主、姫君は御身持不宜、浅香  
 と申賤男か、夜毎く御殿上り踏ミけかし、姫君も  
 善才王に思ひ替へ給ふ、浅香に御心を寄せ給ふ  
 と相見候、元方君の御種をやとし給ふとハ深く  
 隠し、御身持悪敷故懷任ならせ給ふは、君の御  
 名折、帰御ならさる其内ニ、いか様成罪にもしすめ  
 給ふへしと、なき更を有やう二弁舌盡して口々に

[illegible]

讒言す、君聖王と申せとも、讒者の舌のなかけ  
れは、誠と被思召たるゑい慮こそは是悲なけれ、  
公卿臣下大臣も実尤と言もあり、后達のなす業  
なんと評判はとりく也、扱武士六人に被仰付、足  
金の宮罪科二依<sup>而</sup>、是方廿日詰行て、高ひくせん  
金剛か嶋しやくまくの岩屋へ連行捨置へし、  
銀をとらせて被申付、足曳の宮御身持不宜二依て、  
君の帰御ならさる内二流罪せらるゝ、命か有れば  
我々か後日の仇、首を刎て給われと、結金銀を以  
頼より安々と頼れける、扱六人の武士は、姫君の御殿へ  
参り斯と申上ければ、姫君聞し召是は夢か

書かざりし一首御哥

住なれし玉の簾をいまさら

何を惜て我をとむへし

と詠し給へは、武士も哀に思へ共、力なく拾式

一重をぬかせ参らせ、常の御衣に旅装束を

し、菅の小笠に竹の杖、武士二いさなわれ、

しほと出させ給ひける、常にさへ、七重の屏風

八重の几帳の内二住給ひ、土も踏せぬ御身成レハ、

踏なれぬ道、御足痛ミ血流れ出て、跡は紅みの

色に成にけり、其時一首の御哥に

紅の雲井になりゆく我身かな

幕ながら、一首御哥二

住なれし玉の簾をいまさら

何を惜て我をとむへし

と詠し給へは、武士も哀に思へ共、力なく拾式

一重をぬかせ参らせ、常の御衣に旅装束を

し、菅の小笠に竹の杖、武士二いさなわれ、

しほと出させ給ひける、常にさへ、七重の屏風

八重の几帳の内二住給ひ、土も踏せぬ御身成レハ、

踏なれぬ道、御足痛ミ血流れ出て、跡は紅みの

色に成にけり、其時一首の御哥に

紅の雲井になりゆく我身かな

幕ながら、一首御哥二

幕ながら、一首御哥二

と詠し給ひ、願曰は爰ニて命を失へと、

聲も惜ます泣給ふ、心有武士、まきと申所ち

あやしき駒を求め、乗せ参らせ急ぐ程二、

廿日路なれとも廿五日へて、高ひくせん金剛

カ峯、しやくまくの岩や二着二けり、姫君を駒より

おろし奉り、暫ク休めまいらし、西に向せて既に御首

うたんとしければ、刃さんく二折たり、其時姫君の

給ふは、自善才王の后と成り、西城国迄式とせ、

東城国ニて式とせ、身も只ならぬ、一天の御子

姻内にやとらせ給い、七ヶ月半二成ぬれば、我力首ハ

[illegible]

哀なり、御国に君のましくて、内裏ニて御誕生

るをいし七重の屏風、八重の几帳、綾のふとん、  
錦のしとね、姥めのかかしすかれ、君も御寵愛、  
諸民も悦ふへきに、斯すまじき山中に、空に  
一重のおほいなく、枕に立る屏風もなく、する時  
岩をしとねとして御誕生し給ふ、東城国の  
世の末の斯浅間敷御風情、乍去、御父善才王、  
此世にましませ八廻り逢給ふへし、自か命更に  
おしからねと、生ていらるゝ物ならは、王子の  
おひさき見まほしく、叶ぬ浮世是悲もなやと、  
王子をあいに泣しほれ、歎かせ給ふは道理也、  
岩木ならねは武士も、涙を流し居たりしか、

乃也別々、五重の屏風、六重の几帳、綾のふとん、  
錦のしとね、姥めのかかしすかれ、君も御寵愛、  
諸民も悦ふへきに、斯すまじき山中に、空に  
一重のおほいなく、枕に立る屏風もなく、する時  
岩をしとねとして御誕生し給ふ、東城国の  
世の末の斯浅間敷御風情、乍去、御父善才王、  
此世にましませ八廻り逢給ふへし、自か命更に  
おしからねと、生ていらるゝ物ならは、王子の  
おひさき見まほしく、叶ぬ浮世是悲もなやと、  
王子をあいに泣しほれ、歎かせ給ふは道理也、  
岩木ならねは武士も、涙を流し居たりしか、

有ならは、七重の屏風、八重の几帳、綾のふとん、  
錦のしとね、姥めのかかしすかれ、君も御寵愛、  
諸民も悦ふへきに、斯すまじき山中に、空に  
一重のおほいなく、枕に立る屏風もなく、する時  
岩をしとねとして御誕生し給ふ、東城国の  
世の末の斯浅間敷御風情、乍去、御父善才王、  
此世にましませ八廻り逢給ふへし、自か命更に  
おしからねと、生ていらるゝ物ならは、王子の  
おひさき見まほしく、叶ぬ浮世是悲もなやと、  
王子をあいに泣しほれ、歎かせ給ふは道理也、  
岩木ならねは武士も、涙を流し居たりしか、

乍恐王子の御果報をほめ参らせん、石座二 而  
御誕生あれハ、御身持堅く御寿命は幾久し、  
天に満ておそれハ日月の加護其俣に、御位  
光は益々四方を見晴す、国土の主此王子に過へ  
からずと寿けれハ、姫君は王子生先よくそほめて  
頼むと御心を直シ、自も最期の置土産せんと、御くし  
を七ふさにゆひわけて、宅房は善才王江御かたみに  
参らする、宅房は西城國の御父大王江参らする、  
宅房は王子に参らする、一房は未来の産えんま  
王へ参らする、宅房は此山の守護神へ参らする、  
宅房は虎狼野干狸狐猪鹿諸畜類に

参らする、孰も王子の生先守らせ給へと、かたみも  
 跡先取あへす、一首御哥に  
 ミなし子のひと、成へき情をハ  
 岩木ならざる畜類も知レ  
 と詠し給ひ、此世に念は残らねと、恋敷  
 は善才王、名残おしきは王子也、高聲に念佛十遍  
 光明真言繰り返し、覺語を極め給いても、一息  
 つかぬ其内に、御首は前二落にけり、十七歳の花  
 の露、きゆる命は惜しかりけり、御居姿を其俣に、  
 右の御手に王子を抱き、左りの御手に石を押へ、後の  
 岩屋にすかり給ふ、何の願世もなく、王子は空しき  
 骸に取付給ふ御有様、鬼畜ならざる武士も、泪の  
 眼明て見られぬ風情也、此時王子頻りに歎かせ給ふ、  
 御座泣きか、さすか王孫なれはおさな子たり共、  
 御母の別を悲しミ歎かせ給ふともさたか  
 ならず、比は三月十五日とかや、武士共後悔し、  
 此所二捨て置との綸言成りしに、御首を刎しは  
 后達の頼の故、請ましき金銀を受、刎ましき  
 姫の御首をはね、後日二咎何とせんと、悔めと更に  
 かいなけれ、**せめて**御菩提を祈らんと、五人一同二もと  
 取切、直ぐに修行者二成り二けり、菅人は御首を持、内裏  
 に帰り、ひそかに后達に姫宮の御首渡し、我家へも

[illegible]

不立寄、是こそ修行に出にけり、善才王の母上は姫君の御首申請、壺に納め北面の築山二後二埋め、經念佛不怠、座禪供養をなし給ふ、扱、千人の後、足曳の宮の命を失ひて悦夏限りなし、善才王還御ならせ給ハ、誰か先に御用を受給ふへきにや、我先へ人先へ我もくくと争ひけり、兎角恨無シニ鬪取にと、暫シ鳴りもしずまらず、角て、高ひくせんにまします王子は、首もなき御母の乳房二取付おハします、御首のきれ口方甘露出をふくませ給ひ、月日を送らせ給ふ、此山の古狼野干諸畜類集り、飼食にせんとさゝやきける、

山野守護神来り給ひ、汝等能聞、王子の母うへりんじうの時、髪を七房に結び分ケ、汝等迄二施し給ふ、王子を敬ひ空敷骸を守レとの誓也、先々いたわるへしと有りければ、畜類も間分、敬ひかすき奉る、岩屋の口へ柴の庵りを結び懸け、木の皮二て雨を覆ひ、岩の苔をしとねとし、木の葉をつゝりて襖とし、昼夜御伽いたしけり、扱、王子五歳二ならせ給ふ穠の頃、母上の五躰乱れ、御骨もちりく二ニ成二けり、王子はいかゝはせんと歎かせ給へハ、岩のはさまに血塩艸といふ草はへたり、此艸の露をふくミ給へハかん露のことし、なき跡

吾親の背とは、懸る事をやいふらん、比は十月の比、  
 俄二晴天かき曇り、四方の山々時雨して物すまじき  
 折柄に、烏餘多飛来り岩の上にとまりけり、大キ成は  
 上にとまり小きは下タニとまり、父よ母よとさへすりけり、  
 王子御覽し涙を流し、浦山しや、自も父よ  
 母よと敬ひ奉る事、いつの世にか有へしと歎き給ひ、  
 ところ／＼ま／＼と給ふ、御夢に御母姫宮ま見へ給ひ、  
 いかに王子歎き給ふは道理也、我が白骨を岩  
 根によく／＼埋メ給るへし、きうか三伏のあつき  
 日は涼しき風と成りけん、冬そせつの寒き夜は  
 風吹方の屏風と也、御身ニ立そひ守るへし、六歳  
 成り給ふ来年の秋の比、御父善才王此山江尋来り  
 給ふへし、いか成者と問ひ給ハ、父は東城国の  
 善才皇、母は西城国の足曳の宮、父上他国の御留主  
 に、千人の後達の讒言ニて此山ニいさなわれ、自を  
 もうけ、其座ニて武士の手に懸り命を捨給ふ、  
 空しき骸を頼ミ、亦是古狼野干の情ニ而盛人  
 いたすと被申に、母恋しくは西方浄土の阿弥陀  
 如来助ケ給へ、南無阿弥陀佛と唱へ給へとの  
 教ニ而、御夢は覺ニけり、王子御涙を押へ御骨を  
 納め、御泪と共に念佛の聲もふるひて哀也、  
 畜類にかんるいニ己か毛色をかわしける、御母の

形崩れ給ひては、王子は物淋しく思召を、畜類共  
考て欄々慰め奉る、春は艸木の花にたわむれ、  
夏は谷へ下り水あそび、穠は木の実ひろひ  
手遊に、冬は雪玉戯なけさまくいさめ奉る、  
人間の通ひ希成山なれば、御耳二ふるゝ物逆は、  
深山木に吹風の音、谷の水音、諸畜類の聲計、  
狐狼野干習ひ宣ひ、日和に任せ谷々峯々  
御歩行あり、諸畜類の手足にもつれ遊び給ふそ  
哀也、斯て、善才王は、五とせ半立秋の比、北城国方  
薬艸取持せ還御ならせ給へは、宮中国家の賑ひ  
て悦程そ限りなし、千人后達も悦ひて若君の

還御を待兼しか、夏なく御帰国、君の御心は知らね共、  
先江御用を承る夏は鬪取くと、身の業悪を  
かゝりミす勇いさむそ浅間敷、善才王は足曳の  
宮の御事、御心に掛り急ぎ帰国まし、殊二  
懷姻なれハ儲玉待もふけも有へき二、宮中に  
何の噂も無ク、いかゝやと思召、姫君御殿に入せ  
見たまへハ、近きに人の住むやうもなし、御簾も  
几帳も破はて、軒には蜘蛛の糸引渡ス風情、姫  
君見へさせ給はねは、是はいか成事やらんと不審  
はれやらす、日比召使れし者扈人、御前江  
上り申上やうは、君の御留守二千人の后達の讒言

高ひくせんは連行、  
 御姫さまは武士の手二渡り、高ひくせんは連行、  
 彼山二 而 王子御誕生、姫君は御命を失ひ給ふと  
 承り、王子御盛人被成候哉、其後様子不承候と申上  
 ければ、善才皇驚かせ給ひ、彼山江急ぎ行、姫宮  
 王子に尋あわすんは再び内裏へハかゑらしと、  
 御父母江御暇乞も事聞敷、供奉の官人不被召連、  
 唯御老入り旅の勞も其俣二、高ひくせん江急かせ  
 給ふ、無程彼山へ至り金剛か峯の麓に着給ふ、日も  
 西山にかたむけハ、大木を片手二押へ其夜を明  
 かさせ給ひけり、比は七月十七夜、くまなき月の  
 木陰より夢現共わかつ、白纓束二白袴、  
 白緒を打かつきたる女中、露にしほれて来り  
 ける、善才王緒引のけて御覧つれハ、足曳の  
 二ておハします、善才王、是は実か夢か現かなつ  
 かしやと、取つかんとし給へハ、姫は突のけ  
 恨めしのかんはせ、自こそ君二ひかさされ父母  
 を振捨、はるかか國を隔て来て、君御老入りを  
 樂しか、あんの外捨させ給ひ、他國御留守二千人の  
 后達二惡まれ、無実の罪二しつみたり、御國に  
 君のましまさハ斯ハ成行候まし、君のぶんこつ  
 盡させしも皆后達のなす業、病も作病とや、  
 自らも武士の手二掛り、しゆら道二は科して

二、御姫さまは武士の手二渡り、高ひくせんは連行、  
 彼山二 而 王子御誕生、姫君は御命を失ひ給ふと  
 承り、王子御盛人被成候哉、其後様子不承候と申上  
 ければ、善才皇驚かせ給ひ、彼山江急ぎ行、姫宮  
 王子に尋あわすんは再び内裏へハかゑらしと、  
 御父母江御暇乞も事聞敷、供奉の官人不被召連、  
 唯御老入り旅の勞も其俣二、高ひくせん江急かせ  
 給ふ、無程彼山へ至り金剛か峯の麓に着給ふ、日も  
 西山にかたむけハ、大木を片手二押へ其夜を明  
 かさせ給ひけり、比は七月十七夜、くまなき月の  
 木陰より夢現共わかつ、白纓束二白袴、

白緒を打かつきたる女中、露にしほれて来り  
 ける、善才王緒引のけて御覧つれハ、足曳の  
 二ておハします、善才王、是は実か夢か現かなつ  
 かしやと、取つかんとし給へハ、姫は突のけ  
 恨めしのかんはせ、自こそ君二ひかさされ父母  
 を振捨、はるかか國を隔て来て、君御老入りを  
 樂しか、あんの外捨させ給ひ、他國御留守二千人の  
 后達二惡まれ、無実の罪二しつみたり、御國に  
 君のましまさハ斯ハ成行候まし、君のぶんこつ  
 盡させしも皆后達のなす業、病も作病とや、  
 自らも武士の手二掛り、しゆら道二は科して



我骨の有所は皇子ニとわせ給へ、  
 思ひ置更ニ無し、言葉をかゝすも是限り、さらハ  
 給ひ、夢か現か今夢ニと、くまなき月も涙に  
 曇る、くらまされ尋給へと願もなし、御手ニ当る  
 物逆は藪か薄かころひ石、御足もよろ／＼とよろ  
 ぼひまろひ、前後ほうしておハします、哀也ける  
 御有様、明ケなは君ニ尋逢恋しき姫ニと、また  
 大木の本ニたとり付、其夜は明かさ給ひけり、  
 夜も明ケぬれば、幼子は高聲ニ念佛唱ふる  
 聲聞へる、斯すさまじき山中ニ、念佛の聲するは  
 天工変化の業か、但し丸か恋しき王子ならんと、  
 谷へ下り峯江登り尋給へは、五六歳程の童子頭れ  
 出て、髪は赤く苔むして見苦敷風情ニ而、  
 諸畜類の足ニもつれ、花をあひして遊けり、  
 善才王御覧し、それなるおさな子はいか成  
 ものそ、父母の名字氏素性こそいかにと問ひ  
 給へは、皇子立とまり、氏素性ハ恥敷からず、  
 父は東城国の善才王、母は西城国の足曳の宮、  
 御父他国出行の留主、千人の後達ニ惡まれ  
 猜讒言せられ、自を胎内ニ持給ひ七ヶ月

半の比、此山ニ而武士の手ニ懸り給ふ時、暫シの暇を乞  
 たまひ、我を産ミ給ひはかなくならせ給ふ、六歳  
 の間、雨露青草をいたゞき月日を送り、狐狼野干  
 諸畜類の情ニて盛長いたし候と語り給へは、丸こそ  
 父の善才王、汝等此山ニ而誕生せしと聞、又は姫の  
 空しき跡をも見まほしく尋来り候そや、是へ参レ  
 仰ける、皇子実とも思召せ共、人間の類ひ見給ふ支  
 なければ、父の方江近寄給わす、氏よりそたち、自は  
 かく浅間敷風情、父は十善天子、争かけかし申へき  
 と有ければ、御父聞召、いやとよ、親子の中なれば  
 汝は天子の王子也、何隔ての有へきぞ、立寄いたき  
 給ひ悦ひ泪せきあへす、王子も父上と敬ひ給ふ  
 も涙也、御父は王子を寵愛し、水を以て清め  
 こりをさせ、即身成佛の文を唱へ、御くしかき上ケ  
 結わせ給ひ、御衣を召替させたまへは、天晴  
 皇位の徳備りて、御粧ひをミかわしけり、善才王  
 悦ひ給ひ、御名を改メ、善王太子と名付けたもふ、  
 扨、此山の守護神へ御立願あり、諸畜るい江宣ふハ、  
 今迄王子を敬ひ介抱し、人となしたる恩賞、  
 いつの世にか國すへきと、御手を合せ給ひけり、  
 十善天子の御身にも、子故の礼儀と見へ二けり、  
 畜類共聞しき獻慮とかや思ひけん、感涙

肝二めいし、頭を下ケひさまつき尊敬するは  
 理也、大子〇とく御物語り、母上の御形チ崩れ給ひ  
 物淋しき折柄、鳥も数多飛来り、親子の礼を  
 重んずる二付ても、父上恋し母上恋しと歎しづミ、  
 轉寝に母上まみへ給ひ、御物語りニ父上の御名も  
 承る、今父ニあひ奉り母は迷途の旅に立、ま見へ  
 給ふも夢のゆめ、母の御顔見覚へす、今父上と  
 諸共母の御姿見まほしく、添たや見たやと  
 歎とも、相見る夏の叶ハねは、か程二母ニ縁無クハ、  
 何逆腹を借し給ふ、前世の悪縁悲しやと、  
 もだへこかれて泣給ふ稚心そ哀也、御父泪を  
 留メ、過ル國、足曳之宮のなきたまま見えて、  
 言葉をかまし給ふ始終を語り、開来国不老  
 仙人の行法ニは、死たる人もよみかへるとかや、  
 骨を拾ひて彼国へ尋行、頼ミ給へとの物語り  
 と宣へハ、若母上のせせいし給ふへきと御心を  
 取直し、御骨を岩根ニ置候と、御父子白骨堀出シ、  
 また御涙ニくれなから結ニ包ミ、かい来国江急ぎ  
 給ふ、七十五里の道なれば、急かせ給へハ急くたけ、  
 無程開来国室戸の岩屋ニ着給ふ、不老仙人ニ  
 御對面ましますニ、色ニ煙リニくすはりて、苔むし  
 たる額は四海の浪を疊、まゆはさなから

高の...  
人る...  
とまき...  
主候...  
おれ...  
教へ...  
仙ん...  
了せ...  
六〇七...  
如親  
神ノ...  
少者...  
所々...  
私等...  
御方...  
那　向

中夜にありてふとて、  
 足曳の宮は流罪成へき、死罪ニ誰かなす業  
 そ、急度沙汰すへしと、以の外の御機嫌也、善  
 才王の御母は、姫の御骨を堀上ケさせ、結ニ包ミ  
 御衣を添へ孫君に渡し給へハ、太子御首受取  
 給ひ開来国へ帰り給ふ、待侘たる事なれハ、  
 御首を備へ結引かづけ、かんだくだきて  
 折り給ふ、日数昼夜四十二日経て行法の  
 印シあり、なん無くせせいし給ふ、上の結引のけ  
 見給へハ、元の御姿ニ少しも替り給わす、起し  
 奉<sup>3</sup>は九月十四日の午ノ刻、惣髪ひすひのかんさし、  
 御顔のかゝり、髪のきわたけ奉るかみも其俣ニ、息の  
 出入ものこしも、手足の指も心も智慧も本の如く  
 そせいし給ふ御粧ひ也、仙人こそ法力の印シ有、ほとん  
 ど御悦ひ、善才王も御喜悦、姫君諸共ありし昔の  
 御物語り、親子三人御悦ひは限りなし、取訳太子の  
 御祝悦、初め父上ニあひ奉りし時、母上の御事のミ  
 歎きしに、今更母ニあひ奉りまんそくするハ此時也、  
 自ゆへニ父母の御苦勞はいか計、殊ニ母上の御恩賞  
 高ひくせんニまさりけり、今よりは父母を敬ひ  
 かしつき奉り、此御恩報せすんは不可有と、御悦ひ  
 涙せき上ケ、扱、善才王は仙人ニ御布施すへきもの





高き海上をこき出し東城国江着給ふ、内裏二  
 入らせ給へは、善才皇東善王御對めんまし、  
 足ひきの宮は御父母御兄弟久方の御對面、姫の  
 恋しき御物思ひのかこちなき、姫君は身の浮  
 つらき装婆と迷途の物語り、積る噂はやまさ  
 りけり、東善皇御饗應浅からず、仮御殿をたて  
 移し奉り、月日送らせ給ひけり、足曳の宮の御妹  
 玉の姫そ姉君の御殿へ入らせ給ひ、御給仕し給ひ  
 ける、善才王二馴名染、ひよくの床を並へ給ふ、  
 姉君しろし召され、君二も御二心かうつらいやすき  
 浮世と、さのミ思召されず、去れ共兎角此国の  
 住居不宜思召し、善才皇をすゝめ給へは、  
 けに尤と、太子諸共三人は皇宮を忍ひ出て、  
 うつほ船に飛乗り、先と何国と定めなく、  
 浪にゆられて出給ふ、多の海上国をへだて  
 日本に渡海して、若不老仙人のなけさせ給ふ  
 鏡二廻りあふともやと、国々を尋給へ共、鏡の有所  
 知す、御氣に應ずる所もなし、安藝國佐西郡  
 とうかけの里二来り給ふ、佐伯の某蔵本と申人の  
 所二御宿を遊ハし、御休足被成けり、宿主も人々の  
 御圍様を見參らせ御痛敷存、御滞留させ奉り、  
 饗しかしつき御來歴を尋ね奉り、善才皇、

満々たる海上をこき出し東城国江着給ふ、内裏二  
 入らせ給へは、善才皇東善王御對めんまし、  
 足ひきの宮は御父母御兄弟久方の御對面、姫の  
 恋しき御物思ひのかこちなき、姫君は身の浮  
 つらき装婆と迷途の物語り、積る噂はやまさ  
 りけり、東善皇御饗應浅からず、仮御殿をたて  
 移し奉り、月日送らせ給ひけり、足曳の宮の御妹  
 玉の姫そ姉君の御殿へ入らせ給ひ、御給仕し給ひ  
 ける、善才王二馴名染、ひよくの床を並へ給ふ、  
 姉君しろし召され、君二も御二心かうつらいやすき  
 浮世と、さのミ思召されず、去れ共兎角此国の

住居不宜思召し、善才皇をすゝめ給へは、  
 けに尤と、太子諸共三人は皇宮を忍ひ出て、  
 うつほ船に飛乗り、先と何国と定めなく、  
 浪にゆられて出給ふ、多の海上国をへだて  
 日本に渡海して、若不老仙人のなけさせ給ふ  
 鏡二廻りあふともやと、国々を尋給へ共、鏡の有所  
 知す、御氣に應ずる所もなし、安藝國佐西郡  
 とうかけの里二来り給ふ、佐伯の某蔵本と申人の  
 所二御宿を遊ハし、御休足被成けり、宿主も人々の  
 御圍様を見參らせ御痛敷存、御滞留させ奉り、  
 饗しかしつき御來歴を尋ね奉り、善才皇、

新より又作り、かゝる重なる様子を御覧  
 申すに、御覧の如く、此の御座候に、  
 花園の籬の本にあやしき鏡一面あり、取上  
 ければ唯人の手道具とも見られず、かり堂を  
 たて納め置候と申せは、それこそ開来国室戸  
 の岩屋方不老仙人の投ケ給ふかゝミならんと、  
 足曳の宮所持の鏡と合せ御覧すれば、鶴亀  
 を鑄付たる對の鏡也、かのかゝみを尊敬し、  
 綾の戸帳錦の打敷、正金美々しく飭らせ  
 給へは、さなから位を増し明らか也、此所こそ  
 我々住居すべき所と思召、藏本の案内にて沖の  
 嶋へ渡り給ひ御覧するに、山の懸り、水の流、社床  
 町の立横船懸、浦数七浦、景産風景思召俣  
 なれば、嚴嶋と八名付給ふ、然ル所二東城国方  
 御父東善王御母后、西城国方来り給ふ天一天皇  
 御后御子供達、御船に飛乗り御跡したひ、遙日本  
 へ来り給ふ、善才王足曳の宮まします所を尋、安藝  
 国にましますよし、跡をしとふて御幸ならせ、  
 嚴嶋にそ着給ふ、各御對面あり、扱、藏本承り  
 飯殿を立移し奉り、比は推古天皇の御宇、端正  
 五年甲申九月二、帝へゑいふん二達しければ、  
 君ゑい慮閑しく宮の御造営あり、善才王ハ

宿主の心入をかんし給ふ、無余儀様子を語り給ふ、  
 藏本申やう、爰に不思議の支御座候、去年九月に、  
 花園の籬の本にあやしき鏡一面あり、取上  
 ければ唯人の手道具とも見られず、かり堂を  
 たて納め置候と申せは、それこそ開来国室戸  
 の岩屋方不老仙人の投ケ給ふかゝミならんと、  
 足曳の宮所持の鏡と合せ御覧すれば、鶴亀  
 を鑄付たる對の鏡也、かのかゝみを尊敬し、  
 綾の戸帳錦の打敷、正金美々しく飭らせ  
 給へは、さなから位を増し明らか也、此所こそ  
 我々住居すべき所と思召、藏本の案内にて沖の

嶋へ渡り給ひ御覧するに、山の懸り、水の流、社床  
 町の立横船懸、浦数七浦、景産風景思召俣  
 なれば、嚴嶋と八名付給ふ、然ル所二東城国方  
 御父東善王御母后、西城国方来り給ふ天一天皇  
 御后御子供達、御船に飛乗り御跡したひ、遙日本  
 へ来り給ふ、善才王足曳の宮まします所を尋、安藝  
 国にましますよし、跡をしとふて御幸ならせ、  
 嚴嶋にそ着給ふ、各御對面あり、扱、藏本承り  
 飯殿を立移し奉り、比は推古天皇の御宇、端正  
 五年甲申九月二、帝へゑいふん二達しければ、  
 君ゑい慮閑しく宮の御造営あり、善才王ハ

東城國の人なれば、國名を片取東の宮二鎮座あり、東善王、御母后、善才王、足曳の宮、善應太子御對座二而、五社の明神と申奉るハ是也、足曳宮、御父天一天皇西城國なれハ、西の社二鎮座あり、天一皇、御后、兄君、姉姫、又式入りハ弟の姫御對座二而、六社の宮と申ける也、兩本社の本地ハ、十一面の觀世音ちんし、十一神を一才に勧請す、又 宮は、姫宮の御妹玉の井姫、永代神前開夏なし、年に一度、土の餅をミごくニそなゆる也、御父母御兄弟對座有へけれ共、東城國二而、姉君のひよくの床を踏せ給ふ故と見へ二けり、

後、宮を佐伯の某建立の鏡の宮を移す也、磯部の宮は、善才王西城國へとかいの時、風波の難をのかれともふ其時の御願也、はいたての宮は、西城國へ御文の御使したる五鳥也、飯の宮は、高ひくせんの守護神、皇子を敬ひ奉る諸畜類を行司とする也、善才王皇子にあいたもふ御祝ひの御願也、聖りの宮は、開來國不老仙人の報恩のためあんちし給ふ、地の御前ハ御旅所、あら恵美須は、御宿主佐伯の何某藏本を祝也、此嶋の地主の宮は大本明神、何れも日本國中まします諸神諸佛を此嶋に勧請す、端正六年二月に

東城國の人なれば、國名を片取東の宮二鎮座あり、東善王、御母后、善才王、足曳の宮、善應太子御對座二而、五社の明神と申奉るハ是也、足曳宮、御父天一天皇西城國なれハ、西の社二鎮座あり、天一皇、御后、兄君、姉姫、又式入りハ弟の姫御對座二而、六社の宮と申ける也、兩本社の本地ハ、十一面の觀世音ちんし、十一神を一才に勧請す、又 宮は、姫宮の御妹玉の井姫、永代神前開夏なし、年に一度、土の餅をミごくニそなゆる也、御父母御兄弟對座有へけれ共、東城國二而、姉君のひよくの床を踏せ給ふ故と見へ二けり、

鏡の宮は、佐伯の某建立の鏡の宮を移す也、磯部の宮は、善才王西城國へとかいの時、風波の難をのかれともふ其時の御願也、はいたての宮は、西城國へ御文の御使したる五鳥也、飯の宮は、高ひくせんの守護神、皇子を敬ひ奉る諸畜類を行司とする也、善才王皇子にあいたもふ御祝ひの御願也、聖りの宮は、開來國不老仙人の報恩のためあんちし給ふ、地の御前ハ御旅所、あら恵美須は、御宿主佐伯の何某藏本を祝也、此嶋の地主の宮は大本明神、何れも日本國中まします諸神諸佛を此嶋に勧請す、端正六年二月に

少くもしつて教へては江戸の都府府千  
 花の少くもしつて教へては江戸の都府府千  
 花の少くもしつて教へては江戸の都府府千

諸社の作夏始り、同十二月二成就する、其後、平家の

さかんなる時、清盛大政殿、百八拾間の廻廊を建立し  
たまひ、年々御祭礼心も言葉もつくされす、

扱、二月初りの申のほうゑハ、諸社作事始の御祝ひを表す也、三月十五日の御祭礼は、足曳の宮、罪にしづませたまふ時の御苦しミを寿きかへて尊ぶ也、六月

十七夜は、東城國にて善才王、こひにおほれさせ給ふ時、管絃を初めなくさめ奉る粧ひ成り、九月十四日は姫宮よみかへらせ給ふ御祝を表す也、扱、此兩社

大明神の加護御方便の利生、大慈大悲の御誓ひ

諸国二満ちて、老若男女参詣の貴賤くんしゆ

おひたし、御供殿として、河井の郡百八十丁

宛行給ひけり、推古天皇の御勅願なれば、

帝御代々御尊敬浅からず、推古天皇御感状二いわく、

安藝國嚴嶋大明神所御宮殿

百八拾町、從今後唐國之國主八人は

彼宮殿二可備也、宮司之子孫更二

神之位輕を恐可給也、於末代御社

乃敢當國之中國を二重に  
 我々を其の内に納めしめり  
 初め切に我々の痛みの故に  
 我々の心を安んずる  
 此の御託宣に精進之勤を敬之  
 十二月廿三日 右中弁納受  
 端正五年 申

乃大明神御託宣にいわく、我をねんし尊敬  
 の衆生輩は、子孫繁昌疑ひなし者也、若不  
 信心の輩は、末代の妨然るといへ共、大慈大悲の  
 御誓願世に勝れ、一切衆生の悉く凡夫、  
 信心の不屈の輩なりとも守護侍り訖、  
 右の御縁記一度読ミ聞する輩は、神前へ  
 七度参詣仕輩同前也、聴聞の輩ハ一度  
 参詣とおなし、  
 御縁記終り

拝殿、當國之国司たり可本走なり、  
 貴賤上下共信心のつくし、百日百夜  
 潔切にして、錦の几帳を置表を  
 密、百日之間宮司ヲ降テ五戒を保テ、  
 随御託宣ニ、精進之勤尊敬之  
 盈上下不屈不可致所也、

十二月廿三日 右中弁納受

天保三辰ノ

二月上旬

述司嚴吉

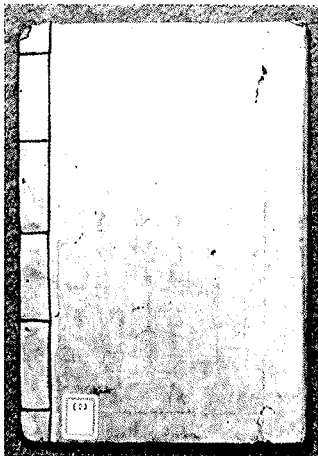
教寬写之

天保三辰ノ

三月上旬

述司嚴吉

教寬写之



## 編集後記

遅れていました『宮島の歴史と民俗』No. 4 をようやく刊行することができました。

今回は、永井猛先生の能楽関係文書目録を掲載させていただきました。この資料は、町内に居住されていた吉村氏が、昭和49年12月、資料館に寄託されたものです。

周知のように、宮島の能楽の歴史は、戦国時代に遡り、その後、今日まで受け継がれてきたもので、この分野に関する研究は、芸能史・建築史・美術史などの各方面から進められてきました。永井先生に作成していただいた資料目録は、こうした研究をより深め、宮島の芸能史・芸能の地域性などをより明らかにしていく上で、貴重な財産になるものと思われます。今回の調査は、短期間で行われたものですが、今後も引き続き調査を進められ、この目録を更に発展させていただければと考えています。

資料館では、現在、こうした資料目録の作成や資料の紹介にとどまらざるを得ず、また、それも僅かな資料について不十分な形でしか為されていない状態です。しかし、それが必要不可欠の作業であることを考える時、資料館設立の本旨に立ち帰り、資料の保存と併せて、資料館の基盤を固めることが焦眉の急を要する課題ではないかと思います。その意味で、関係者の方々のご理解とご協力をいただければ幸いです。

町史編さん室は、開設後5カ年を経過し、「町史の歩み」にもみられるように、編さん事業も順調に進捗しています。これには、町民の方々をはじめ、数多くの人々の協力・援助が大きな推進力となっています。残念なことに、その中のお一人であった広島女子大学助教授堤正信氏が、昭和60年9月13日、留学先の中華人民共和国杭州市で急逝されました。故堤氏には、宮島の古地図のトレース、旧土地台帳の整理などの仕事をしていただき、『歴史と民俗』No. 1にも寄稿していただくなど、宮島には深い関心を寄せておられました。ここに、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

### 宮島の歴史と民俗 No. 4

昭和61年3月20日 印刷

昭和61年3月30日 発行

編集 宮島町立宮島歴史民俗資料館  
宮島町史編さん室  
発行 宮島町立宮島歴史民俗資料館  
印刷 日本写真印刷株式会社

